



麻生路郎主宰

新徳洲柳



九月號

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

ドーマポ椿豆伊

精の椿島大 一唯産國

輝く美髪



伊豆椿香油本舖

いさ下用愛御に直今
りあに店薬品粧化名有國全



不朽洞句稿

麻生路郎

父も子も一列空の護りに出
燈下管制そこへ大きな月が出た
有名税あはれはかなき膳の上
裸にて候 残暑にて候
雲の峯相場の如く崩れたり
パパとママ週末といふ鍵をかけ
有閑の表札もなく乳の函



川柳雜誌 第十一卷 第九號 目次

文苑

頂點をゆく……………阿部閑生 (四)

武玉川二篇研究 (五)……………梅本秋の屋 (一九)

兄弟を語る

森東子省二 (一九)

▽見合の晝寝……………須崎豆秋 (二八)

▽眼鏡の奥の人生……………長谷川三灯 (三九)

▽天才でない……………大島無冠王 (四〇)

▽神の悪戯か……………大島黃子朗 (三一)

笛の上手……………蛭子省二 (三六)

探幽に就て……………楊半山 (三七)

月評 金、銀、鐵……………西田艸樂 (三三)

古狸窟隨筆 (六)……………福田山雨樓 (三三)

川柳家名鑑志……………梅本麿山 (三五)

川柳パイロット欄……………山雨樓 (四四)

福田山雨樓 (四六)

頂點をゆく

—大門・某人・柳兒・其他

阿 部 閑 生



川柳にも優劣とは別にそれ／＼好き嫌ひがあつて、一人の佳句とするもの必ずしも衆人の肯定を得ると限らないが、主張の如何に拘らず、壮大なる語や俊鋭なる字を使つて一見して目を射るの光芒を好む表面描寫の讚賞から、特別の奇はなくとも何處かに深い體驗から得た人生觀のかけらがにじみ出てゐる讀者をひそかにひきつけ、惱める心を裏面から慰め、鬱積せる胸から憂ひを取去るやうな内面描寫の作品に、次第に傾倒するのが文藝一般に對する觀方の経路ではないかと思ふ。

この見地から此頃の近作柳樽に對すると全く沈衰から脱して華やかな一時期を作りつゝあるやうである、每號讀みごたへのある句が殖えてゆく現狀は歡ぶべき事である、これに與つて大いに力を張つてゐるのは大門であつて、投句の初めから健腕を示し

昔なの子もしつかり纏む暗い道

あたりから面目を發揮し來り、珍らしく駄句を作らぬ人として每號注意の焦點となり

著置いた音聞いて待つ不足稅
病人の機嫌にうごく粥の湯氣
決斷のにぶい男を犬を嗅ぎ
雲が目についてマラソン抜かれたり
など次ぎ／＼に吾々の求むるものを充たし、略同じ觀點を擇んだと思はれる他者の句が兎角一本調子に流れてしまつて、私だけの評語で云へばべた足の句になり易いのに對して、大門の句には何れもちやんと土踏ますを持つてゐる。犬が嗅ぎ、の語の如き如何にこの句の内容を複雑化してゐるかに注目したい。

水の味もう大阪でないのなり
旅に病んで添書汚してしまふなり
叱られに行く扉の前で鉦かけ
國の家たゝんで來たる下げ袍

慥かに掴むべきものを掴み、含むべきものを含んでゐる、取材の廣い狭いとか、川柳の進むべき方向だとか、表現形式の是非だとか、そうした問題とは離れて、日常身邊の事物を遲疑なく

捕捉し來つて、自分の好む手法によつて無關心と思はれる讀者の意識を容易に呼び覺ますといふ行き方である。

次に最近突如として此の欄に現はれ、これも最初からうまい句を見せて目覺しく躍動せる人に某人があり、圓熟せる技巧を以つて精彩を誌上に放つてゐる。

殺された役者へ樂屋からの風

手紙焼く煙は空へれぢれゆく

家出した影とは知らず水すまし

子がれらふ蜻蛉の上に天主閣

些の澁滯も見せず何れも手際よく作られて流暢な句になつてゐながら爾も浮薄な影を止めないのは相當に推敲の苦心が拂はれてゐるのであらう。大門の句は鋭鋒を包藏して表面頗る溫藉であり、某人の句は情熱を沈潜せしめて外觀唯輕妙である、句材に對する心契の深さには變りがない。

ともかくも一軒持つた墓参り

蜂一つ座敷を空にしてかへり

嘴み切れぬ鳥貝世辭を聞流し

落日の死他人が泣いて呉れるなり

何れも垢抜けのした句と云へやう、同じ境地を句にせんとしたる經驗から斯うした内の一句に對すると、作句の技に服せずには居られない、大門の質、某人の才、相作り相讀んでお互ひにも張合ひのあることゝ推察せられる、この二人の句には教へられる所が多い。少くとも締切前の作りツ放しは顧みて忸怩たるものがある。

華麗ならざれどしつくりとして吾人の心を曳き、この欄より

逸する事の出来ない人に柳兒がある。

快方へ金の工面が迫るなり

目覺しも所詮搾取の立場なり

少しも氣取らず山を張らざる實着な表現、どこかに體得したるおちつきがあり、薄闇の中の孤燈の光りを思はしめる。前月號の

時節わきまへて家主の低い腰

も佳付たるを失はない。尤もこれ等の句の外にも佳句は澤山あることであり、單に記憶に残つてゐるだけでも

親切のつもりまじない褒めに來 沙 門

は句面に現はれない心情の深刻さと複雑さがあり「つもり」の一語云ひ得て餘さず。

夜櫻に巡查あご紐かけてゐる 正 祐

もう歸る蝗の串へ夕焼ける 青 坡

故郷でする洗濯は蟹がゐる 春 水

水飲んでなんにも慾はなかりけり 珍 景

それ〴〵獨自の特技を揮つて異つた色を見せてゐる。呆氣ない句を割愛しても味はふべき句が多くなつた近作柳樽の盛況を祝福し、更に活氣の横溢を此欄に渴望するものである。

個人の作句にも浮沈があり、一欄の投句にも盛衰があるのが常であり、川柳は間歇的に噴出し、波狀に移動し、圓狀に向上する。高いと思つた所が案外に頂上ではなく、後れざらんとせば進むより外に仕方がない、現状を謳歌しながら、更にこれから



近作柳樽

路

郎

選

ストツブに牛の涎の垂れてくる
 こゝらから惚れる砂踏む撮影所
 傳言板へ對つたことを叩かれる
 刺青の龍家ダニに食はれてる
 晝寢覺め子供の喧嘩分けてやもり
 朝涼の第一便に無心狀
 いさかつて出て来て露の多い夜
 金の嘘あまりすらりと出て淋し
 勤先にてチーム結成
 野球狂時代日向を走らされ
 療友の母さんに
 療友の子をおもふ汗が滴くする
 療友の妻女を思ひて

大阪

大門

神戸

某人

姫ヶ池

流之助



病臥久し (二句)

手を曳いた子も背の子もわたしの子

病院のはでなゆかたもさびしいね

兒が泣いてゐる夢ぼくも泣いてゐた

蠅の脚珠數揉む様に動くなり

足洗ふ波が目高にさからひて

帯結ぶ女の影は跳ね躍る

釣瓶漏る水が育てる井戸の苔

内輪揉め負けた争議にあからさま

蔭口の主へ氣まづく押黙り

ハンストの強身はみんな獨り者

高飛車に出る挨拶も久しぶり

六十にちかく生活にすぎがなし

頬紅が酒場の女とはななりぬ

かまきりの飛ばむとするやかなしかり

けものらがわれらのこひを嗤つたな

さときびを嚙んでむかしのゆめとなる

仰山に鍵持つて居て二階借

松山

長野

尾崎

登ヶ池

今昔

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

耕一路

柳兒

月

籠

郎



病院が第二の故郷とはならぬ
病んでゐる私へ月のあをじろく

妹見舞にくる

妹のひとみさみしくすんでゐる
昇給の高へ努力をしいられる
裏町を通れば蠅がついて来る
たそがれに心の通ふ勤め人
さつ束を撒いてやりたい兜町
雑沓を目安に前科ふみはづし
砂利深く深くいあつの表札

病床吟

雨だれはわたしに死のといひました
好きな娘のひとみに頬がうろたへた

旅のをんなを詠む (二句)

倫落の身に人の世のうらおもて
再會と云ふ横顔へ灯がくらし

おんなと云ふもの

お金にするといけないものがひとつあり

鑿ヶ池

松生

廣島

同承春

神戸

同九葉

大阪

同新市街

鑿ヶ池

同静太

高知

同映珠

神戸

同食兒



ばらそるをこひしい影にかさねます
 病める娘に浴衣の寝巻を着替えさせ
 弾力がある初夏の水渡し舟
 夏祭り蛸の相場がチト上り
 病み上り晩の肴を釣つて来る
 眼鏡ふいて無死満塁の唾をのむ
 横向いた切りの女へ煙草の輪
 生きて行く灰色の街はすに切り
 けつまづく我が心境にあせるなり
 眞夜中を恐く鏡を覗いたり

病 篤 き 日

血の匂ひやつぱり生きてゐたい僕
 茶を運ぶ職あつたで髪を切り
 テンポとは思へど父の若返り
 諸君！と呼びかけたい蟻の群

繭 價 安

爆發しさうに繭の山まつ白し
 淋しき日時計の捻をまいて寝る

大 阪

大 和

神 戸

大 阪

豊 ヶ 池

千 里 山

長 野

豊 磨

同 葉 光

同 翠 峯

同 吉 左 右

同 天 國

同 松 雨

同 沐 天

同 有 爲 郎

同 耕 朗



漠然と笑へば妓も笑ふなり
 かさくとして街路樹のひるの風
 煽風機止めてアダリン効く時分
 夜の机小虫つぶしてうつろなる
 夜の蠅舵のくるつたやうに飛び
 凡人になれと絲瓜が云ひました
 巡業は雨の降つてる驛に下り
 人物が出来て理窟に遠ざかり
 紙屑となつた馬券にある未練
 ズロースははいて居ります濱の風
 目の前でやせた女をみる悲哀
 たわし賣今日の寝場所を考へる
 胸を病みて

富山市の一隅にて

富山	釜知	大坂	大聖寺	廣島	大坂	今治	壱ヶ瀬
照坊主	同梨生	同史呂	同醉羊	同蛙庵	同末廣艸	同心府	同縷紅



いけ垣の奥にくすりの匂ひする
 粉薬の折目をたどる 退屈さ
 煙草屋の奥から本を伏せて立ち
 腹立をこらえた腫とは知らず
 曇天へぼたりと落ちた百合の花
 洋犬を飼ひ男氣のない生活
 風呂に行くだけの銅貨をためてゐる
 お父さん口笛吹けば兄のよう

敬慕する機見女様より突然文を頂く

空想が事實となりし文うれし
 獨身論病氣になつて悔いてゐる
 風は吹け平凡な日に飽いてゐる
 やどかりを追ふやどかりが水の底
 繪日傘や舞妓素顔のまゝにして
 よく食べる女給そだちを見せて居る
 悔恨へひきする酒のほろにがさ
 去年きた顔其のまゝの仲居居る
 縁談がなんの其の夜足角力

又ヶ丘

今治

神戸

京都

盛ヶ池

今治

栗島

京都

同 貴代志
 同 小樓
 同 好啓兒
 同 白英
 同 志津女
 同 一風
 同 春帆
 同 咲星
 同



代筆の悲しいことを書かされる
 フト浮んだ名前小学校の友
 水門の眞つ晝鯉の行進だ
 川風に吹かれ農夫の子は眠り
 何も無い郵便函へとんぼ来る
 捨てられたマツチの軸の淡いけむ
 あれが置屋の娘だすアツパツパ
 涼み臺教會行きを誘はれる
 旅歸り顔の蜘蛛の巢なでて入り

宮島参詣

駿のなない袴案内人の咳
 夕餉の膳すませて皆な佛の灯
 不平もつ割には弱い男です
 吹けばとぶ蚊のいのちにも似て淋し
 毛蟲どう動いてみてもいやがられ
 教室の窓から梧桐をよそ見する
 貧しさの中に人間愛がある
 薫風やバスの車掌の立姿

壺ヶ池

青鬼

松江

同 勁一郎

大坂

同 一 沫

今治

同 伶 人

新居濱

同 孤 鶴

金澤

同 緑 水

壺ヶ池

同 巷 巴

大坂

同 寒 草

今治

同 松 花



遠ざかる君の心の影一つ
 手にふれるものみな暑き母の部屋
 ダリヤ腫にありみじかきねむりからさめる
 金魚賣りふとそゝられし冷や奴
 妻歸るこの日時計の振子見て
 要領を得よと女將に教へられ
 枕邊に置く錢入が淋しいぞ
 その予後は壽命に任かす藥瓶
 さみしさに子の口笛をとめに立ち
 すてられる螢にひかりもはやなし
 女と並んで眞夏の風は涼しいね
 先生と呼ばれ藥劑師損をする
 祭禮にあんど見に出る隠居部屋
 川底の石はつきりと秋深む
 パラソルにきたいしてゐる小半町
 順調な男にされて戀がなし
 銀貨銀貨夜へこつそり抜けて出る
 土工等の荒々とした親密さ

繪玉

大阪

同
高知

大阪

今治

大阪

松江

大阪

京城

大阪

辨戸

名古屋

今治

大阪

同
いね三

同
トミヤ

同
利生

青雨
たけを

小松
白葉

祥月
清美

大口坊
花涙

勝太郎
崙喜固齋

輝親
いの助



ほる 苦き酒と友とを見比べる
 青空が僕の素性を知つて居る
 シヤボテンの開花其の夜は 雨なり
 煽風機は朝で 蠅が遊んでる
 これでまだ利かねば薬かへまする
 炎天下草取る無我をつゞけてる
 ふと死など 賭ても見たい 戀思ふ
 誰知らぬ心を抱く夜の男
 朗かな氣分 朝顔數へて見
 あわれさは女給の部屋の荒びやう
 月白く戀は 苦ししい 涼臺
 青春がはてなき海に浮いていた
 めしをたくにほひ キャンプの朝は明け
 母と云ふ責任がある化粧なり
 釋放の嬉しさ 煙草にも 酔ふて
 樹くゞる 姿わたしは言ひすぎた
 灯となつた格子ボンヤリ 浮く化粧
 轉向へ暗い家庭が待つて居る

金澤	新潟	大阪	廣島	名古屋	大阪	豊ヶ池	島根	廣島	清水	神戸	豊ヶ池	加賀	大阪	京都	和歌山	今治	神戸
伊良湖	善知鳥	氷炭	芳泉	三八朗	美代坊	白蝶	好郎	無人	珍風	朝雨	月氏	義風子	菊路	ゆきら	百文	五郎	久米雄



童謡にハズも交へて明るい灯
 恩師もう在はさぬモダン新校舎
 看護婦も身内の様に泣き葬り
 現實は理智より金の巾がきゝ
 白粉に酔つたお酒の愚痴と意地

妓の部屋

鏡臺へせめて白百合生けてゐる
 轉任を兎に角口に惜まれる
 隠居は樂だ君も隠居になり給へ
 役人は時間勵行して歸り
 出來豆をスポーツネエと云ふ女給
 辯解は性分ですと氣が強い
 倦怠期肥えるにまかせ切つた妻
 ヒヤカンもサクラの役になるだらう
 晝陽中腕ぐみをしてどうする氣
 たまに氣が付いて丁稚のひやかされ
 洗濯の老母へプロの身の悲し
 通り魔の様に夜更を白い猫

奈良	西宮	奈良	今治	同	大阪	豊ヶ池	大阪	堺	大阪	高松	今治	松江	廣島	清水	豊ヶ池	大阪
青柿	三代吉	双亭	蛇之助	大露	有魚	素風	廣石	一柳	桂枝	柳夢	紫陽	榮吉	春陽	御穂子	左人	牧人



防空豫習見學

醉ふた夜の財布に残る花名刺
 丸刈にした日生徒と仲がよし
 健やかな母の小皺がふとさみし
 へん先を社長忘れた頃に變へ
 断つてサテ巡禮の後姿
 星遠し長屋ねむれぬ論議する
 言ひ負けて白々とした灯へ坐り
 びくついてゐるへ六人目がとまり

仇討の身装よろしく婦人會
 拾錢に三羽のひよこ無事育ち
 夜遊びを暑さのセイにしてしまひ
 神經衰弱巡禮になるといふ
 戀しさに過去などのがめまいとする
 飾船なかで女給の厚化粧
 草刈の手を休んでる頬かむり
 バス揺れて單衣の肌が押し返す
 魂がふれ合つて居て逢えない夜
 れんち窓塵も光りてて陽射しする

和歌山 奈良 神戸 兵庫 大阪 島根 泉州 姫吉屋
 大坂 同

遊女男 世間音 襦 寒 美 正 岸 呂 耽 青
 女 音 坊 草 代 明 岩 烈 琴 一
 男 音 坊 草 代 明 岩 烈 琴 一
 女 音 坊 草 代 明 岩 烈 琴 一
 男 音 坊 草 代 明 岩 烈 琴 一



武玉川二篇研究 (五)

梅 本 秋 の 屋
 森 子 東 省 二 魚

(135) 狩衣は茶を呑たひに腕まくり

省 二 狩衣の實物を見れば、直に背づける。江戸時代狩衣は種の禮服であつた。

東 魚 二 「呑たひ」は「呑むたび」とか「呑む度」とか書けば、分りよいと思ふ。狩衣と云ふ様なしかつめらしいものに對して、腕まくりと云ふ可笑味を見付けた處が句の山である。

秋の屋 二 狩衣には限らず、僧侶の法衣でも同じであるが、人の餘り氣のつかぬ、狩衣を持來つたのが作者の手腕である。

(136) 肩へかけると活る手ぬくい

省 二 腰にさげたのでは、ちぢむさい。さりとて鉢巻では大事になるかもしれぬ。肩にかけた手拭で威勢もよく又趣味的でもある。

東 魚 二 肩の手拭は全く趣がある。が今のやうに職人業がカーキ色の詰襟服を着る時代になつては、この趣はわからない。秋の屋 二 豆絞りの手拭で、此れはどうしても江戸子である。

(137) むた書をして梶の葉をかむ

省 二 七夕には梶の葉に詩歌を認たもの「梶の葉にくばりあやまる女文字」(凡菫)。此句は「むた書」として居るが、古川柳は「梶の葉の下書芋の葉へ書いてみる」などと詠むのである。

東 魚 二 書き損じを噛むのは得てする事であるのを、梶の葉の歌の場合にもつてきた處が面白い。

秋の屋 二 梶の葉をかむは少し亂暴で、馬ならば知らず人間には出來ぬ業である。

省 二 梶の葉をすて位が、尤も穩當ではある。一尺餘の葉だから。

東 魚 二 噛といつても、クシャ／＼にかむわけでない、女がよくやる袖をかむなどと云つた風に、一寸くわえる様子で、なにを書いたの——あら見ちやいやだワ、の趣で一寸くわえた艶めいた姿と、私は考えたのである。

(138) 雨たれ越にかるひ相談

省 二 雨垂越の話なら、軽い相談位にちがひない。

東 魚 全くその通りである。

秋の屋 現代の蜂窩式住宅にも、よく有りさうな圖である。

(139) 朝日のあたる盗まれた窓

省 二 盗人の這入つた窓から朝日かさす。―這入られた跡の、いま／＼しさ、朝日のあたる窓を見た時は、あきらめねばならぬ様な氣もさざしてくる。

東 魚 日がさし込むだ處に、如何にも馬鹿にされたやうな心持ちがある。「盗まれた顔へやう／＼日が當り」であつたか柳樽に同案の句がある筈。

秋の屋 窓へ日が當るよりも、顔へ日が當る方が、一層面白と思ふ。

(140) 掌を死所にするきり／＼す

省 二 可憐さに同情かわく。

東 魚 此のきり／＼すは、今の所謂こほろぎの方ではないやうに思ふ。

秋の屋 籠に飼はれる蝨蠍だと、哀れさが一層まさるのである。

(141) 鳥邊山送り出して耳か鳴

東 魚 「送り出して」はあの世へ送つての意で、鳥邊山で愈々茶毘にふして、悲しみに興奮して、耳も鳴る思ひがされるのであらう。

秋の屋 鳥邊山に於て茶毘に附する棺を、自宅の門より送出し、その後で耳が鳴るといふので、茶毘に附して後の悲しみではなからう。

省 二 鳥邊山へ送出して、ボンヤリしてしもう悲しみと思

はれる。

東 魚 私も始めは家から棺を出す場合と考へたが、然らば「鳥邊野へ」とありさうなもの、鳥邊山とあるから、鳥邊山に於てと解すべきだらうと考へた。

省 二 御尤である。私も貴説の如く解してもみたが「送り出して」だから、前説だと思ひ直した。

(142) 工夫してきのふへ返る紺屋形

東 魚 染形を色々考へ直してみたものの、結局初めにきめたのが、矢張りいと云ふのである。私は「意に満たで染屋又訪ふ小春かな」と詠むた事があるが、此句の輕味に對して如何にも、洗練されなさをはちる。

秋の屋 「工夫して」は、考へ直しての意であらうが、未だ洗練が足らぬやうで、猶一工夫ありたいと思ふ。

省 二 工夫考してである。中七が技巧ならむ。

(143) 美しい顔て咄か長く成

省 二 美人は一生の得だ。到る處で歡待される。

東 魚 長くされる方は困るのだらう。

秋の屋 單に美人といふ而已ではなく、美しく化粧して、久々で來訪した女といふ意であらう。

(144) 誘ひに來ると見へて割膝

省 二 心特の態度が現はれて居る。―割膝は正座でなく、膝を大きく割つて居る姿。

東 魚 職人衆などが、着物の前を膝頭の間に挟み込むやうにして、据つてゐるのを割膝でかまこまつてゐる、と云ふ様に考へてゐる。此句もそれで、外出に着替へて、職人などが、あぐらでなく、連を待つてゐる場合と思ふ。

秋の屋 割膝に就ては、巢林子の「雪女五枚羽子板」に「頭を下るに隙もなく、わりひざ痛くともすれば、女子のすまひしどけなう、云々」とあつて、多数の人々が一室に込合つて坐ることである。

省 二 爲念、辭書をみると「膝の間をすかして坐する事」
「左右の膝頭をやや外方に離し開きて坐する事」とある。これで句意に添ふ。

秋の屋 「言泉」には、割膝に就て私の解説と同じことが書いて有るが、一語に二義があるのかも知れぬ。

145) へんくと叩く御寺の大工小屋

東 魚 大工小屋を設けた寺普請であるから、相當規模の大きなものと考へられる。「へんくと叩く」は、飯時とか煙草休みとかを知らせる爲に、太鼓のやうなものを、何か叩く意であらう。

秋の屋 「べんくと」は、事物が遅々として、急速に進行せぬといふ意で、寺院の普請は在家と異りて、工事に手間がとれて、何時までも金槌で釘を叩いてゐる、といふのである。

省 二 大きな普請でもあり、又寺なる雰圍氣からも、急工事で建立されるのは、有難味も乏しいかに感ぜられる。べんくと進捗しつたつあるのであらう。

東 魚 寺普請の大工小屋で、釘を叩くやうな事はさうないから響を叩くとした方が宜しからう、成程さうらしく思はれて来た。

(146) 母の自慢は錦木の敷

東 魚 諸方から求婚のある事は、母の身にとつて、得意にならざるを得ない。

秋の屋 母の鼻高きこと三千尺。

省 二 父親の鼻も亦一三千尺。

(147) なからへて新地にすたる眞桑瓜

省 二 瓜畑も發展につれ整理して、新開地となつた情景か
—それとも、新開地に賣残つた瓜か。

東 魚 俄に家普請などの議が起つて、眞桑の畑も廢される
と云ふだけではあるまいか。

秋の屋 兩國川の三叉の新地で、盛夏には納涼の人が多く出て、果物も多く賣れたが、漸く秋風が立初めて、人足が尠くなると、店頭に賣れ揃つた眞桑瓜が、遂に廢り物となるといふのである。

東 魚 成程、正解であらう。

(148) 向ふへ鑓のしつむ長橋

省 二 勢田の長橋などと、一つは長く一つは短く二分され、鑓のしつむで、見え隠れる様は、長橋たるを現はす。

東 魚 橋の反つた有様が目にみえる。

秋の屋 勢田には限らず、兩國の橋でも宜いと思ふ。

(149) いつ述て櫓に光る飼螢

省 二 螢の命は短いもの、櫓に光るは衰さを催さしめる。

東 魚 櫓に光るは全く淋しい光景である。

秋の屋 螢と櫓、奇抜の配合で、平凡作家の思ひ及ばぬところである。

(150) 弟に餘つた乳の水くさき

東 魚 弟が飲み足りたあとを、未だ乳戀しい氣の抜けぬ兄の子が、しやぶつてみると案外旨くないので、やめる場合かと思ふ。(私の家などでは、未の乳兒が乳を飲むでゐると、其上

のが傍へきて、母の乳を手でさわつたりしてゐるのを見る。又自分も飲まふとするやうな事もある。

秋の屋 此れは乳の味が甘くないのではなく、弟の飲むた餘りを、兄に飲ませるのが水臭いので、これが餘らねば飲ませぬ故、情が薄いと云ふのである。

省 二 私は前説の二つを頭に描いたのであつたが、乳の水臭い方にきめたのは、いかにも情の水臭い説が、句の内容を複雑にし詩的にもとれるけれど、弟に充分容ませて、餘りを兄にするのは、順序である一般の母親はそんなに愛しはせぬかと思つたからである。要するに前句がわかれば決定するのだが。

(151) 鐘の音 斗黒き雨乞

東 魚 日照続きで物皆白日に目を射る計りの光景の中に、雨乞の鐘の音が一種の物凄さを含んでなり渡る。それを「黒き」と感じて現はしたのであらう。

秋の屋 「黒き」の二字は、凄愴の感が起る。

省 二 巧みな表現。「雨乞の聲きはひけり雲の峰」(和三)などより、鐘の音の黒きが優る。

(152) 銀のちろりの通ふ紅圍

省 二 艶めいた情緒だ。「銀のちろりのお寢間から出る」(金砂子上)。

東 魚 春宵一刻價千金。

秋の屋 銀の銚籠は大名道具で、平人の使用する器でない。

(153) 京町のやりての聲て猫の眞似

省 二 京町の猫通ひけを踏むでゐる。遣手の猫の眞似は一興。

東 魚 此の遣手には一分やつて惜しくなからう。

秋の屋 遣手の容貌も、化猫に似てゐやう。

(154) 土俵うしろへ請て梅の花

東 魚 野道を來て、道側の梅に佇んだ場合ではないか。土俵で晴れ乾いた暖かな日和が想像される。

秋の屋 探梅がてらの郊外散策で、數里の道を歩むた趣である。

省 二 郊外や田舎道は土俵のひとついもの。

(155) 長い祈に割れる勝山

東 魚 一心に祈願をこめる勝山鬻の女。ぬかづいては振り仰きつつ祈るので、髪は亂れ鬻が割れると云ふのであらう。

秋の屋 勝山鬻に結つた女が、狐憑病か何かで、他より祈られるので、其女自身が祈るのでは有るまい。「源氏物語」の葵の上はその一例である。

省 二 祈られる方が複雑だけに句はイキる。

(156) 兩陳をすくひ仕廻て勤化帳

秋の屋 「兩陳」は何とも解し難い。

東 魚 同上。

省 二 ？

(157) 取楫は疊のうへて成仕事

秋の屋 嫁が姑女其外に對する取楫で、これは疊水練でなくとも出来る。

東 魚 軽い諧謔。色々の場合にとれる。

省 二 嫁の手練。

(158) 卷のも手間のとれる國狀

秋の屋 故郷より赤紙付きの書状がきたので、吉事か凶事かを早く知らうと、それを開封して、一讀しながら、一方の手にて巻き納めるに手間がとれる、といふのであつて、まじまじでははかどらぬ女の状であらう。
東 魚 母親の手紙かなどで、タド／＼長文句が連ねてあるのだから。

省 二 長いのと、氣がせくので。

(159) 泊客主の口か辛く也

秋の屋 「口が辛い」などといふ言語は、餘り使用されないが自宅に客人が幾日も滞留して、立去る様子がみえぬ故、主人が速く出て行けがしに、何か耳障りのことを言ふ。といふのではないか。

東 魚 泊客の方の氣兼ねで、主人か何か云ふにつけ、氣に掛るのであらう。

省 二 辛く也はスクなると云ふ様な謂ではなからうか。主人が口がスクなる程言つても、泊客が遠慮するのではなからうか。

(160) 金に勝のは只ならぬ顔

秋の屋 賄賂を贈るから、自分の請託を容れてくれと頼むのを其様な不正の事は以の外だ、と血相を變へる硬骨漢の、只ならぬ顔であらう。

東 魚 面白い言ひ廻しである。理窟めかずに詠み得た處が手腕である。

省 二 金は魔物なのだから。

(161) 賣家を隣に持て淋しかり

秋の屋 如何にも隣に賣家が有つたならば、甚淋しいに相違ない。

東 魚 人情を穿つた句だ。隣が空家になつて妾が引越たがると云ふ句も武玉川にあつたと思ふ。
省 二 空家でも淋しいのだから、賣家では多少不氣味にも覺えさせられる。

(162) 雪やくそくは雨性の伊達

秋の屋 雨性とは外出する時必ず雨に遭ふ人のことであるから、明日あたり雪が降りさうであるから、降出したらば向島邊へ、雪見に御同道いたさう。私は雨性である故、外に出れば必ず雪も降ります、と妙な自慢をするのであらう。

東 魚 雨性の伊達は面白い。
省 二 伊達の二字など、容易に使ひこなせぬところだ。

(163) 直のなつた跡の祭にはつせ山

秋の屋 「武玉川」には初瀬山を詠むだ句が多くあるが、これに就て年頃考へてゐるが、解釋する事の出来ぬのは遺憾である。
東 魚 初瀬山（泊瀬山）は大和の泊瀬の觀音のある處で、こゝに祈願をこめる、戀の祈である。もはや意中の人は結婚が成立して、即ち賣約濟（直のなつた）であるあとの祭に、はつせに祈願したとどうなるものか、と云ふ意であらう。

省 二 初瀬の句は、櫻をよむだものゝ外は、凡そ戀の祈願である。然かも女が祈る方が多い。

(164) 鶯は谷へ戻してかたみ分

東 鶯 主人公が死んだので、夫々形身分をした。が遺愛の鶯は供養に籠から放して古巢の谷へ戻してやつた。

省 二 短詩の含蓄深き詠み方。
秋の屋 前説賛成。

(165) 夜は老そめる九ツの鐘

秋の屋 九つの鐘は、午後十二時であるから、漸く夜が闇け
初るといふのを、「老をめる」といつた迄であらう。

東 魚 二 「老」はフケと讀まして、眼から訴へる面白味に「老
」と云ふ字を當てたのではないか。

省 二 「フケ」説可。

(166) 人のくすりに燈す峰の火

秋の屋 二 「峰の火」は京都の大文字の火であらうが、「人のく
すり」が判明しない。或は支那の妖婦褒姒の故事かも知れぬ。

東 魚 二 峰の灯影がちらと見える。あんな處にも住めば住め
るとか、或は、あの庵に行ひすましてゐる人だとか、何かなし
つたのではないか。どうも大文字らしくは思はれない。

省 二 「くすり」を的確に註釋せぬと、判らない。

(167) 書置に引くらへたりあつさ弓

秋の屋 二 市子に口寄せをさせて、自殺者の語る所を遺書に引
當ててみるといふのであるが、目前に其遺書を置いて、引競べ
るのではない。

東 魚 二 「引くらへ」は「あつさ弓」に云ひかけてゐる句法。

(168) 蚊屋一重向ふに人をあやまらせ

省 二 場合や人物は色々あらう。蚊帳裡は主人、外は使用
人。或は親仁と道樂息子。

秋の屋 二 人物は決定し難いが、父親と息子とみて差支へな
からう。

東 魚 二 堅い後家かと考へてゐた。

省 二 蚊帳であるから、一説でせう。それに「人」と用ひ
て居る故、注意は拂ひたい。「向ふに置いて」だと、息子のやう
な気分がする。

(169) 言譯のくらい男へ飛ぶ螢

省 二 道端で言譯にこれ努めて居る男の顔のあたりへ、螢
が飛ぶ。情趣がわく、言譯にも。

秋の屋 二 言譯をして居る處へ、螢が飛んでくるのではなくて
出入する事の出来ぬ所に、男が佇むでゐるに、偶々螢が飛む
で来た爲に其姿が顯はれ、其暗い言譯をするといふので、戀の
闇路の出来事である。

東 魚 二 前句に對照すれば分明しさうであるが、戀の心持ち
もあるかのやうに思はれる。

(170) 傾城と見たはひか目か竹の奥

省 二 竹の奥は閑靜な住ひの謂。たゞ者ではなさそうだ。

傾城だらうなどとの噂。

秋の屋 二 笹の根岸の寮らしい情景である。

東 魚 二 贊。

省 二 「下地」は下地ツ子、見習の謂。一生懸命に聲をし
ばり出しての稽古。

秋の屋 二 雛妓の寒聲ならむ。

東 魚 二 まだ年の行かぬいたいな様か思はれる。

(172) 腹たちの手元へ見へる鳴子引

省 二 時には腹もたて、亂暴に鳴らさずには居れぬであら
う。「不きげんを人に知られる鳴子引」(古句)。

秋の屋 鴨子引は多く不具者が低能者であるが、此れは少し骨の有る者であらう。

東 魚 巧みであるが、聊か作意が目立つ。

(173) 水を女の怖そうに掃く

省 二 女がしとやかに掃くさま。

秋の屋 「掃く」は「撒く」の誤りならむ。

東 魚 溜り水などを掃く場合と思ふ。足元へはねるのを氣にして、怖そうにそつと掃くのも流石に女氣である。

(174) 我物に師走は戻る借し座鋪

省 二 貸別荘も師走には借主が歸つて行き、空家となる。

秋の屋 現今でも學生の年末の休みになると、貸間が空虚になる。

東 魚 年末の一抹の淋しがある。

(175) 精進落に大判を見る

省 二 精進落に死者の話から世間話も出て、かまつてある大判を取出し見るの敷。

秋の屋 死亡した親の四十九日の忌も過ぎた故、遺産の大判を取出してみるので、これは相續者の人情である。

東 魚 「大判を見る」は、中々奇抜な云ひ方で面白い。

(176) さし合を抜けは聞へぬ願書

省 二 「差合」は他人に對しては支障がある謂。「願書」は願ひぶみ、差合の箇所をぬいてしまへば、願書の主旨が判し兼ねる様になつてしまふ。

秋の屋 お説が妥當。

東 魚 願書の文句などは、どこか誰かに迷惑な處が出て來

る。その差合ひを遠慮してゐては、願書の意が通らぬ。私など役所へ願書を展出すが、關係の役人に遠慮してゐては中々願書の筋は通らない。(工事の延期など頼む時は正に此感が深い)。

(177) ゆく／＼は螢にならん艸の庵

省 二 腐草爲螢。

秋の屋 庵主も北邸の煙とならむ。

東 魚 上品な洒落を云つたものだ。

(178) 瘡の毒を知りてかむふみ

省 二 問題の文が來た一癩が起きる。

秋の屋 他より來た文であらう敷。自分の書きかけた文ではない敷。

東 魚 全く自他がよく分らぬ。

(179) 鏡から崩れそめたるおさな顔

省 二 鏡に對する、即ち年頃になり、化粧するので、段々幼な顔が變つてゆく。

秋の屋 「崩れそめ」は少し可笑しい。「變りそめ」では無からう敷。作者が技巧を弄したのであらう。

東 魚 原本明かに「崩」である。生れたまゝの神の様な飾りのない所が、化粧を施すやうになつてから、失はれそめると云ふのであらう。

(180) 疊んた物の見へぬ獨身

省 二 ぬぎ捨て。亂雑なところが獨身趣味さ。

秋の屋 下宿屋住居の學生などは、大方かかる態であらう。

東 魚 我々が工事で出張先きの合宿所などは全くその通りである。

研究の研究

笛の上手

蛙子生

武玉川初稿研究（昭和八年六月號）

(360) 笛の上手に身を捨てる鹿

の解釋に對し、某氏が奈良方面を迄、御調査の結果、鹿笛に上手ヘタといふ事が有るか無いかを答へて呉れた人がない。さすれば、これは「笛のカミテ」とよむべきで、又その方が「調子もよい」どう思ふかとの御意見を寄せられた。

此作は私共には、別に難句とも考へられぬところから、至極簡單な註釋がしてあるのであるが、「番傘」誌（昭和八年

十二月號）にも質疑句として「川柳相談

所」欄に載つて居る。私への申越が、な

ぜカミテと讀むべきかの詳細な説明が附

してないので、その因る點が更に判らぬ

けれ共、カミテでは意味がとれず、又「

調子もよい」とは背けぬ。察するに鹿笛は

吹けば鳴る丈けであらうとの、御疑問か

ら出た、句釋への御工夫ではなからうか

然し笛だからこそ、上手ヘタの言葉が用

ひられるのであり、實際上上手下手のあ

つた、他例に古俳句

鹿笛の上手をつくす哀れさよ 樹 水

で、カミテでない事が證據立てられる。

鹿笛に就ては武玉川の他篇に句もあるか

ら、その折り詳述するとして、閑田次筆

卷之四を抜記して置く。

「淡海八幡に仙房といへる俳諷師、鹿笛

をもてりし。形凸如此し。物體木にて

造り、底は皮にて張り、黒漆にてぬれり

吹時は左右の中指にて、此底をしごく

やうにすれば、自由に音を出す。是は

信樂の獵師幸助といふものの與へしと

いへり。此幸助、此笛を吹こと上手にて

妻鹿の音をふけば、眞にせまりて寄來

らざる鹿稀なり。されども若しおもふ

がごとくより來らざる時、子鹿の音を

吹には、必よると語れりとぞ。悲しむ

べし。其態によりて親しく其情はしれ

ども憐れむことをしらす。百舌鳥が衆

鳥の聲をまねびて、其ともかとおもは

せて、執喰ふたぐひ成べし」

私共の論講して居る武玉川研究に關して

は、御遠慮なく御指示を希ふ。繰返し見

つめてゆき度いと思ふ。（四月三日）

狩野探幽に就て

支那 楊 半 山

支那に次の諺あり

好話別レ犯レ疑 犯レ疑没ニ好話一

如何に好い話でも疑を犯せば（犯をオコスと云ふ訓があるかないかは知らないがこゝではさう讀まねばならないのである別は勿と同様に使ふは支那語の常例）限のない事である。

徳川家康公は釣鐘の銘を口實にして大阪方へ怒りつけるのもこの例に漏れないではないかと思ふ（實際この鐘銘問題は今に不明である）本誌五月號（十一卷）五十三頁に古狸窟雜筆三十九條に仙臺間話を引證して狩野探幽の號を論じて「遂に後世の笑草となれり」とあつた。

この話は大分以前から私は聞いて居る

が別に調べた事もないが此度一寸調べて見ると探幽なる語は左の出所のある事がわかつた。

晉書第五十五卷潘尼傳所載釋奠頌に

抽演ニ微言一。啓發ニ道真一。探レ幽窮レ隲。

溫レ故知レ新。

とある。又晉書隱逸傳序に（卷九十四）

窮レ吳垂レ景 少微以隱ニ其次一。文レ繁探レ幽

貞遯以成ニ其象一。

とある、それから唐の陸龜蒙の詩に

探レ幽非レ遯 世 尋レ勝肯迷レ邪 又云々

不ニ必探レ幽上ニ爵同一。公齋吟嘯亦何妨

ともある。以上四つの證佐もあれば、探幽と云ふ語は決してミダラがましい事ではない事がわかりませう、であるから仙臺間話に云ふ長崎に來た華人はどんな人

だつたか知らないがあれの云うた事はマツタク曲解であつて決して正解ではない曲解ならばモツト甚しいのがある。

滁州西澗

唐韋應物

獨憐幽草澗邊生。上有黃鸝深樹鳴。

春潮帶雨晚來急 野渡無人舟自橫。

この詩は可なり有名な詩であるが、明時代のナンとか云ふ人がこの詩を非常に猥談だと云うて居る。何となればこれは寡婦の局部を詠じたのだと云うて居る、勿論それは曲解であるが、これも相當に知られて居る。それにさう云ふ風に曲解の出來ない事もないのである。

だから作者の動機は究竟するにどうであつたか今更一千何百年前の人に尋ねる事も出來ないからそれ〴〵いゝ加減な解釋をなすのである。思へば芭蕉の

古池や蛙飛び込む水の音

と云ふ句に對してもホメル人もありクサス人もあるは孰れも芭蕉の知らない事である孰れが正解であるか却々簡單に出來ないのである。

兄弟を語る

三汀は小學校時代から、遊んでばかりゐてもズツと首席で通した秀才で、

小さい町の「くすり屋の主人」として

おくのには勿體ないやうな氣がいたします。

川柳は千葉藥專在學中より「キヤリ」の讀者

だつたさうだから私より先輩かも知れませんが

私が歸省するといつも裏の「ときわ」といふ

料理屋で二人だけの川柳句會をやります。

見合の晝寝

須崎豆秋



「の大廣間で、ちよつと晝寝をしてゐたといふ朗らかな挿話があります。

結婚八年未だに子が無いので 今春

ひました。四月號川柳塔の三汀の句

初生兒死す(二句)

よく寝入れ初湯の湯醒めせぬ内に

み佛を抱けばかる。隙間風

私は編輯の時、此の句に觸れてヒヤリといたしました。

(君汀三川谷長は眞寫)

なつかし／＼酒がこぼれる 三汀

これは私が此の前歸つた時に矢張「ときわ」の二階で老妓に墨をすらせ乍ら書いた彼の短冊です。

私の部屋の柱に煤けてゐる。この短冊を見るに思

ひ出されます。

三汀が今のお嫁さん

と見合をする折、羽織袴の儘とつぜん行方不明になつたので、お母さんや仲人さんか、びつくりして騒いでゐるとも知らず、當の御本人は此の「ときわ

未だ胎内にある妹の兒を貰ふ豫約をして産衣をつくつたり育児法を讀んだりして出産を待つて居りましたところ、その兒は生れるとすぐ亡くなつてしま



豆秋は私の異父兄にあたり、私よりは十ばかり年上だ。

讃岐金比羅象頭山の裏側の山峽に、俗塵を遠く離れた僻村がある。豆秋は其の縁深き大自然に包まれて中學卒業までを、所謂「お坊ちやん生活」に恵まれたもので、兄のあの温雅な風貌や性質は、この時代に深く培はれたものであらうと思はれる。軍隊生活、結婚生活以後は、急轉、事ごとに人の世の苦杯を喫し、世間の辛慘を嘗め其の悶々たる心を、或は酒に忘れんとし、或は啄木張りの短歌に紛はさんとした時代が有つたやうに記憶して居る。稍々もすると、ほと走り出でむとするこの苦慘時代の反逆的な氣持を、持つて生れた温雅な理性の皮膜で覆ふたやうな物が、現在に於ける豆秋の人格内容であり、此處數年來は更に川柳三

味の生活により、益々その皮膜の温健さを加へてきたやうに考へて居る。豆秋の常に言はれる「川柳即生活」などと言ふ事は斯様な状態にある兄の性格の境地を意味するものであらうと私は思つて居る。

だから豆秋のニ

一モアの底には痛々しい悲しみが潜んでゐるやうにも見受けられ兄の陶然と酔ふた眼鏡の彼方には、あの前半生の受難時代の片鱗がかすかに閃いて居るやうにも見受けられる。

豆秋は漸く不惑を越したばかりだ。私は弟として兄が再び確乎たる足どりを以て、積極的に社會に潤歩されむことを希望して止まない。兄の如き逸才

眼鏡の奥の人生

長谷川三汀



眞寫は須崎豆秋君

が、僅かな、心の傷夷のために、實社會から幾分でも逃避的角度に立たれる事は、社會的にも全く惜みて餘りある事だらうと思ふ。

とまれ、豆秋は、なつかしき人間で有り、ユーモラスなインテリで有り

善き川柳人でも有らう。私は兄の川柳を愛する。さうして句作に耽る兄の眼鏡の奥に「人生」といふものの、面白さ悲しさが繰りひろげられて居るのを、敬虔な態度で想像して居るのである。

(九・八・十二)

兄弟を語る

兄弟を語る

その頃の番傘同人と云へば、可成僕達に對し威嚴があつたものだが、それを彼黃子朗は主義主張の爲め未練もなく、三四年以前に投出して、川柳街に彼の主宰の「木馬」と合併した時には偉い男だと思つた。

天才でいな

大島無冠王



(眞寫は大島黃子朗君)

彼は昭和四年最初から一人前以上の作家として出現したのだから、ひときは天才の稱があつた。然し彼は決して天才でない。常に級長であつた彼は、事實十四五才(大正七八年)から川柳を知つてゐたか

らである彼は物事を廣汎に凝視めて事に當るや素晴しく熱心である。

點を時々見ることは争はれない。どうも兄弟のことは書けない——然しそれでは白紙になつてしまふので簡単に記してみた。「川柳街」七年六月號松窓先生の川柳作家論「無冠王と黃子朗」が書かれてあるので、是れを讀んで頂ければ甚だ好都合である。

その結果いゝ川柳を生むものと思ふ。兎角、僕と彼は句風も性質も、顔型も正反對であるが、どこか血縁の一致

かくて春香脱石に光りあり陽をよけて乗る戀人の美しさ父待ては柳の花は散るばかり瓦斯タンクおぼろ〜。月。下逢へず——去年の水着みづぎの地蔵盆見舞にゆくその途々の地藏盆萬事休す主治醫の背中見てゐた以上は所謂黃子朗調の美しくして深味ある最近の作「川柳街」は勿論「双ヶ丘」等の句風の主潮を爲すのも當然なことかも知れない。

無冠王を語る、を書くには先づ似ない兄弟が十組に一組位ひあるとするなら、その一組が私達兄弟であらうと思ふ、といふやうな書出しをせねばなるまい。僕を知つてゐる人で無冠王を知りたい人は、僕を裏返して見ればよい。會社員で社交家で愛煙家で酒には弱いがある情緒も知つてゐる有髭細面の好男子で、神經質に見えるが朗らかな一面のある、新興川柳からスタートした好作家が無冠王とするなら、その正反對の、商賣人で非社交家で、煙草の香りも嫌いで、川柳は番傘から出た。丸顔の背は大きい、氣の小さい、そしてETCの男が即ち僕である。無冠王が机に倚つて中央公論をひもどく時、寝轉んで大佛次郎を愛讀してゐるのが黄子朗である。近眼七度の僕に對して人

一倍遠眼が利く彼などは噴き出した。一程造化の神の悪戯を思はせる。唯一つ似たところを求めぬなら聲がやゝ兄弟らしいといふ程度で同じ屋根の下に住み乍ら一緒に散歩に出たことは恐らく一年に一過もないかも知れない。心細い兄弟であるが、それは僕が悪いのであつて無冠王の兄弟思ひは何の變りもない。そして誠に仲の良い兄弟であることは僕達を知つてゐる人々が皆まで證明してくれるであらう。特に附記したいのは、無冠王が僕の三つ上の兄貴であること

神の悪戯か

大島黄子朗



(寫眞は大島無冠王君)

でこれだけは反對にとつてもらつては困る。

弟から見ても作家無冠王は京都に稀な獨自性をもつ得難い川柳作家に映ずる。そして僕を羨しくさせるのは川柳を心から楽しんでゐることである。樂々と作つてゐることである。だからあの寛潤な川柳が生れるのであらうけれど川柳に苦しみ抜いてゐる僕には美望を通り越した嫉みをさへ感じさせる。賣別莊あゝ松籟を聴きながらまことにうまいものである。

兄弟を語る

月評
金
★
銀
★
鐵

福田山雨樓
西田艸樂

近作柳樽より

テスマスク苦々しけに世を
みつめ

有爲郎

艸樂——一見してクロテスクな感じの中に

或る死者に對する作者の回顧が「苦々しげに」の主觀に盛られた異色ある句と思ふ。

このテスマスクが、何時になつても、その相貌を崩さず、未來、永却、此の世を見つめてゐるかと思ふと、何れは死を免れぬ人生に何か嚴しい警告をしてゐる様で、逆も長く見つめてゐる氣になれないテスマスクである。

山雨樓——なるほどこの句の主觀は面白いしかしテスマスクである以上、眼を開いたのではないことだらうし、「世をみつめ」と云ふ

叙法がちと概念的で、着想の奇警だけに作爲がちらついていかぬ。寧ろ世を憐んだテスマスクの方に凄味があるやうに思ふが、これは主觀の徑庭であるから止むを得ぬことだ。

要領に生きて先輩四十歳

いの助

山雨樓——世間と云ふものをよく見据えた句である。そしてそれが川柳と云ふ形式を通じて表はれた爲に、可成り鋭い皮肉を句はしてゐる。

從來句主の多數の警句を見てゐるだけに、この句の裏にある思想が想像され思想背景をもつた句の重さと云ふことも想到される。四十歳に近い僕にはヒンと來る句だ。

艸樂——作者が見る先輩が、要領に生きて

ゐるかは知らないが、それは一種揶揄的な眼ではないだらうか。人世要領ばかりでも到底いけないのだが、句主が鋭い眼を有つてゐる點は、一つ逸れると、とんでもないものを見る事もあらう。私は山雨樓氏と少しく見を異にして、「彼氏うまくやつてゐるな」といつたものを感じる。

いとしき父

孝行の一つに父の愚痴をきき

鴉天

山雨樓——句主鴉天君は先般若くして逝つた人だ。この句はその辭世句ではないにしても晩年の句に相違ない。永らく病床にあつて生れた句だけに、再讀襟を正さすものがある。それと云ふのも句主の川柳を通じて人間そのものが描き出されてゐるからであらう。今にして見れば實に尊い句と云ふことが出来る。

艸樂——此の句は、山雨樓氏の評によつて句主が既に他界の人であると始めて、知つて再び見直す氣になつた。「いとしき父」の前身も憐れさを語り、永い病ひに父の愚痴もちつと堪えて聞いたばかりでなく、寧ろ父のい

としさを悲しみつゝ亡くなつたのか、それがせめての父への孝行であつたのか、故人の病床吟と知つては、同情の念禁す能はずである
長男をいたはる多産系の母

柳 兒

艸藥——もし、「多産」といふ題で作句でもすれば、概念的な作意からかういふ句が出来ても知れない。それだけに此の句に迫力があるかも知れない。それだけに此の句に迫力が乏しい恨みはあるが、翻つて或る特定の多産系の母として見た時、次ぎから次ぎへと子が生れ、自身は幼児の成人を待たず年を取つて了ふ、いづれ長男の厄介にならねばならぬ事などを想像して、そゝる此の荷の重い長男を思ひやる母の姿が浮ばれる。軽々に看過し難い句として推唱する。

山雨樓——さうだ「多産系の母」なんて云ふ言葉は尋常に出るものではない。さう云ふ事實に直面するか、斯る慈母を載いてゐる限り思ひ當りさうもない言葉だ。

句主は作句精進に熱心な人、しかも生活派川柳に特色のある句風を示してゐる。この句などその還境から創作された、實感句なることを疑はぬ。

輪廻だと不運を僧は軽く説き

徳 三

艸藥——人の世の不運不幸に對して、因果應報だとが輪廻(りんね)だとかの諦觀的佛教思想によつて、生きた魂の救済が六ヶ敷しい不満さは作者と思ひを一つにするものである。「僧は軽く説き」の措辭は作者の不満と、僧を馬鹿にした態度さへ見えてゐる。

山雨樓——句主の他の一句「寫經する女へ算の絶えの音」も佛教に縁のあるところから見て、句主は僧籍にあるのかも知れぬが、兎に角坊さんの濟度する態度に、不満を訴へてゐることは受取れる。

佛教の深遠な教理と佛陀の無限な慈悲とは、凡俗の遽かに至り難き境地ではあるが俗臭紛々たる僧侶の御座なりを批判する。眼は痛快である。

句想は違ふが「嫁の愚痴和尚から〜笑ひのけ」のうまさも學ぶべきである。

遠足へ鈴の音一直線に行く

久米 雄

山雨樓——穿ちを主にした句ではあるが、よく捉まれており、單調な田舎道などを嬉々と

して打連れなつて行く小學生達の行列が、巧にスケッチされてゐる。

艸藥——小學生も、比較的下級の行列、リュックサックにつけた可愛らしい鈴が音を立て、行く、「一直線に」こゝに川柳味が盛られてゐる。抒情句に柳味を盛る呼吸が會得されてゐる事を賞して置く。

退屈は足音等もなつかしく

里 十九

山雨樓——句主が店の改築竣工を待機中、假住居の路次をくぐつたことのある僕は、この句を前にして、あの路次を思ひ浮べて見た口入屋、長唄の師匠、髪結び等色々並んでゐたそしてあの路次の雰囲気が大變なつかしいものに思はれた。

だが僕はこの句に心をひかれたのは、句主が正直に生活を詠つたその正直さにあるのだ。親孝行の句主が足なのばしてゐる姿を見るやうで。

艸藥——同じ八月號に、同氏の句で「退屈さ今日は金魚屋ひやかそう」があり、共に一時の無聊にあぐんでゐる態が現はれてゐる。

里十九氏もあまり技巧を弄せず、卒直な表現に個性を詠ふ作家の一人で、川柳雜誌社にと

つて嬉しい存在だ。

父さんがないできつうに子
を叱り

曉 童

艸樂——句の相よりして、亭主に先立たれその忘れがたみを育てる寡婦の姿を見たい。寡婦ながら人に後ろ指を指されぬ様に、子を育て、見やうとする勝氣が、他人の目には、あままで叱らなくとも、思はれる程の厳しさそれは人前での氣強さであるが、人なき所では叱つた兒を涙でうるんだ眼で眺める事もあらう。無限に聯想を湧かす句だと思ふ惜しむらくは、私の想像が妥當であるか否かの決定を許されぬ所にある。

山雨樓——句解賛成である。が陳腐な句であることを遺憾に思ふ。しかし藝術の工作は「何を」でなくて「如何に」であることから考へて、この句を陳腐だから云つて捨て去ることは出来ない。要は今少しく観點を深めて、表現の上にも「おれの子をおれが折檻する大工」の巧みさに迄突き進めることだ。

自轉車の丁稚が蛤門を抜け

豆 秋

艸樂——そのかみ、禁闕九門の一、蛤御門は

素町人の出入が許されるころではなかつた。又幕末の京師情景の一つ、長州脱藩の志士達によつて、倉津、桑名藩等を目して、君側の奸を除かんとの名の下に起された、蛤御門の合戦、そうした史實を想起するうちに今は泰平と時代の推移、此の物々しかりし御所の門を丁稚が自轉車で駈け抜ける。句は單なるスケッチに終らない。至極のんびりとした情景の中に、讀者に一度「氣を附け」を號令する。

山雨樓——この句の場合「丁稚が」の「が」は問題である。調子の上では左程目立たないけれども、句意には相當の影響がある。若し「が」ないとすれば寫生本位の句となつてしまふ。「が」があると寫生から一步引き戻して、艸樂氏評の通り懐古的情想をそゝる句になるのである。重點のかゝる「が」である
背中の蚊を妻に叩かせる

華 水

山雨樓——讀直ちに微笑まされる句。里十九君の佳唱「新妻の大丸詰へ蚊が止り」を思ひ出す句。そしていと朗かな句主の圓滿振りを涼風と共に拜聽することの出来る句である。この句が十四音字の額様の中にこそ

あれ、調子がぎこちなくて無技巧の表現であることは否めないが、その稚拙さが一つの妙味を添えてゐることも見逃がせないと思ふ艸樂——「ちつとしてゐやうと額の蚊を叩き」といふ古句がある。これに競べると技巧の點は數等劣つて見えはする。まあ、山雨樓氏の「稚拙さが一つ妙味を添へて」評が當つて居り、句主の新婚の朗らかさがまだ續いてゐる時代の作として、かうもあるべきでせう。

起されて十六時間働く身

幸 捐

山雨樓——朝の五時から夜の九時迄、奉公の身はつらいと云ふことをしひひ／＼思はず句しかしこの句はつらいとも苦しいとも言つてゐない。只ありの儘を述べてゐるのに過ぎぬ。さて讀み直して見ると上五の一起されて」に妙手の存することに氣付く。

艸樂——この上五の手法、これが短詩の持つべき味である。徒らにねつっこい主觀的な文字を使はぬと満足出来ないのは、洗練の足りない手法である。延てはかういつた巧みな手法を氣づかず讀過する様でも會得した川柳家でないと言へやう。



東京の音聲

▼久しく柳界から消息をたつた夢一佛、近頃正光居へ時々顔を出して、同君の仕事をしたすけてゆくとときく。尙正光は例の「巖松堂展望」へ「柳誌雑考」をかく由。

▼「きやり」を辭めた壽山の近業として、「花柳吟壽山調」趣味雜誌「ほうすき」の刊行がある。もつとも後者は寛、しげを

○丸と組んで出されたものであるが、同人が皆こゝろよく執筆してゐるさまは、嘔む方でも氣

持よく真をめぐつて行ける。「壽山調」の紹介は「川柳書架」にゆづる。

▼周魚當番のきやり八月旬會では、選者を投票によつて定めたいさうであるが、九史・陣居、花川洞の順で當選した。併し人氣と實力とは必ずしも一致しないと思ふ。といつて、是等選者の實力を云爲するのでは決してない

しかによくこたへる言葉だ。
▼ランドスケープや美人を常に排撃する三太郎主宰の「川柳研究」の表紙によく風景が用ひられる。こんな事をかけば、蒼々亭宗匠は、今度會つた時「お前は頭が悪いね」吐き出すやうに言ふに違ひない。

▼正岡啓、遂に酒盃と別れを告げるといふ。この人からこの言葉なきくのは、餘程神經作用の鈍な僕でも、悲痛な感じが湧いてくる。

▼出かける／＼と言つてついぞ姿を見せなかつた啞三味、陣居の二人、俊英花戀坊を加へて、

「關西訪問三人旅」と堂々名乗りを擧げていよ／＼九月九日、

静岡をふり出しに姿を見せることになつた。搦天揮毫の「川柳三人旅」とかいた柿色の襷をかけてくるさうだが、かなりの壯觀を呈するだらう。大阪には、

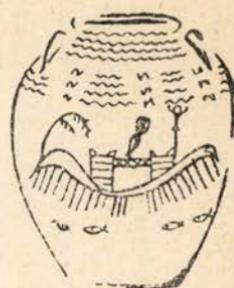
十一日から十三日迄滞在する豫定であるが、その間大阪柳壇は東都の珍客を迎へて、明朗な初秋のトピックが生まれることだらうと思ふ。

風景が從で、人物が主だといふブランドから、關西川柳家はがつちり彼等の爲に、歓迎のスクラムを組んでもらひたい。

▼「きやり」二十日より川柳風俗展覽會を開く由。成功を祈る。

▼食滿南北、十月七日より十一日迄、東京の高島屋で「劇畫展覽會」を催す豫定。その節は御後援を願ふ。之は陶泓居士人の代辯。

▼八月五日花戀坊、第二世をもうける。この夜うきよ吟社の東京灣周遊吟行の舟中へ「まるた」と稱する銀鱗が躍りこみ、彼氏の爲の「お頭つき」となつたとはめでたし。



川柳塔

路郎選

福田山雨樓

正直な仲仕の鼻に光る汗
橋下の午睡きんたま出してゐる
太陽を賞め大掃除屁古たれる
退職たのをくさしておくも處世術
ゴミ取りの二人弱氣になつて挽き

防空演習所感

爆音はミリタリズムに又一機
糸瓜の風で親子夕飯

富士登山（四句）

頂上へ這ふ人間のチツボケさ

浅間神社奥宮にて

頂上の印を貰へば錢の音
砂走り下界の塵になつてくる

太郎坊に下山して

霧霽れて天を望んでふりかへり

朝田新水

慾捨てゝ見れば世間は馬鹿ばかり
戀人と戀敵とに今日も逢ひ
バタ臭い中に働く薄化粧
チツプばかりで食ふても行ける顔
交際費だけに乏しい雄辯家
カフエーを知らぬ男とあざけられ
ない時は上かん屋での顔馴染
貧乏の底に指輪を手離さず
世の中を一年生で過ごしたし
想ふこと間借の身にもなつてくれ

たばこ吸ふひまを見られてゐたりけり
訓導の服はあせたり佳き日なり
普請場に施主と覺しき紹の羽織
存在を無視して上座へ通る足
こんにちの米の相場へ動く人
退出のわびしきものぞ靴の泥
極樂の氣配がすなり寺の鳩
義理がたき人とつきあふ冷凍酒
俗人夏の埃をかぶつて來る
父親のちがふ二人と教えられ

勿體ないと田舎からしよつちゆう來て叱り
祖父若く父と兄弟ぐらひにし
近所づきあひせぬとて大人しい妻を非議
こゝらあたり未亡人が住むと覺えたり
あさましき女角力を見て悔ひし
離縁もならうか秘密の片割よ
麻座蒲團こゝから生駒の灯が涼し
習つて來た洋裁がビエロの様なもの
病名を慘酷につけ癒し得ず

仕拂を忘れ給へるかと思ひ
水遊び肩に袂を結びあひ
補回戰たけなは雲の峰かはり
名投手母の給仕にかしこまり

防空演習

防護團の腕章つけて神輿昇

淋しは夫のことと姉のこと
氷枕妻の留守とは知らぬなり

○ 喜多 春秋

理解とか何んとかむすめ親不孝
こゝに我ありと云ひたいじれつたさ
俺様のこゝろ祝ひのワンコツブ
蚊帳を出る女の腰のやはらかさ
寄り添ふて商賣女の酌いでくれ
村は追ひ出し山は送つてくれました

防 空

今日の雲滲機くる日の雲になり
人多し人多し軍部大異動

負かさねば勝てず勝たねば負かされる

市場没食子

入籍と出産届しに出掛け
今月は僕が世帯を持つて見る
かくて秋悲しき戀に終らしめ
悔悟してたゞ正直に死を選び
梳髪で待つてゐる患者控室
當然の自滅を辿る社長
閨學校をよせとは親も云ひ出せず
君だけにあかしくよと奢られて

大鶴喜由

一直線に黙に走る鯉が俺だよ
程のよい自己宣傳を見込まれる
訥辯の主張は舌に乗つたまゝ
空想にすまじきものにハンニズム
不意の客おもちやのはしに坐らされ
兒を寝かす尻へ八百屋が話しかけ
自分さへ忍べばなど、卑屈なり
代書人鹿爪らしく無駄を聞き

水谷鮎美

子の砂と遊びトンネルこしらへる

偽物をつかむ女の唇紅き

氷塊のとけるにまかす美しくしき

朝顔の赤がうれしい妓のうちわ

片戀に眞白し晝の心太

浴衣着て若くみられてゐるのなり

夏の晝醜女は本をよみおはり

寶石部あれやこれやと落着かせ

氣紛れを妻も知つてゐるスクラップ

天井板敷へてゐると博士いふ

氷囊へ妻の手足の顔母の顔

負けぬ氣の女二階を借るといふ

おみなへし咲いてゐてさへ侮られ

日野華水

長男出生

百貨店ベビーセットの値を覺え
せつばつまれば人間も出来るもの
表情もなき色街の朝をぬけ
待たされる女に廣い大阪市
父母と居る部屋へ大きな蜘蛛が来る

夕顔の咲き誇りたる露路をぬけ

平井春光

一瞬の合圖朦朧見逃がさず

残飯が喰へるとこまで落ち給ひ

着物は賣つたがラヂオは残し

虫を聴くこゝは三越バルコニー

冷房と態々書かぬ大老舗

梶谷巷二

陽の下にその青春を女工さん

愛人にきけば算盤などはいや

人情を論じて金に困つて居

兼川の鴉天君を思ふて

秋風よちとおそく吹けキリギリス

貰ひ子と云われたくない天瓜粉

熊谷紅

秋の風和尙は世辭にうとい性質

戀すまじ寝轉ぶ草に秋の風

二錢切手買ふのは戀でなかりけり

取り込へ無口は走る用ばかり

交番の窓へへチマが垂下り

西いわを

住友は太いホースで水を撒き
空襲の話ビール泡を干し
消火器の何時迄此處に置かれて居

東谷聞路

世帯とはこう云ふものか冷ややつこ

血色の悪い女が口を入れ

親のある友と話が合はぬなり

おどけて見せる心淋しき

平井與三郎

科料まで取られたしがない小商なひ

家族湯へせんに来た時とも云へず

氣の入らぬ方の女に借りがあり

防空演習

非常管制みぞれいつしか溶けてゆき

後藤青兒

イカモノに肯定ばかりつゞくなり

女なら前に塞がつてゝもよし

ブルジョアの子供が瘦せたテント村

文明に飽き山の上山の上下

志川渡鹿野にて

クーボンの客かと海女にたづらねれ

植山九天

さくらんぼ昔の二人にして呉れる
五月雨を石炭舟が曳かれゆく
ピンセットきたないものはさむやう

尼 緑之助

しんみりとなれば戀とはつまらなし
あゝ不平の小つぼさにあされるよ

故き鴉天君を憶ふ

田儀をおもへば今年の夏かなし

石丸 春峰

カルピスのコップにフット笑ふた泡
両親に言はせば顔は第二番
男の子早父親の肩を持ち

荒井英賀夫

ひとりゐる静けさ程にふたり居る
貧乏が笑はぬ男にしてしま
もう少しお世辭を云へと叱られた

明石 柳次

喫茶店甚平で来て面白し
梳き髪は鼻緒のゆるい音で来る

震災後初めて歸郷す

この邊が僕の家だつた茄子の花

吉田 水車

小ざかしゆうニマリ笑らふことになれ
前金の食堂へ来て席がなく
士官さんついでのをやうに敬禮し

竹内 機見女

あつひにおのが日誌をあざむきぬ

縁雨さまの結婚を祝して

よろこびへトマトも赤き厨なり

武田尾にて

想ひ邪なく足に來る魚

姫田 夕鐘

がばとはね起き財布をさがす
里ごゝろ一輪挿に誘はれて
獸々と來れば思ひは海に入り

奥野 禿山

死んだとは見えぬ顔なり吾兒なり
云ひすぎをかげからわびるやるせなさ
衝動を平氣よそおふ年となり

宮岡 白峯

夏休みコップのわれる音がする
旅支度妻に非常時はの一つ

葬式の爲に残して面白し

中澤 濁水

告白にすつきり廻る煽風機

奢る氣の友は執拗い友になり

江戸みつる

夏の夜肌の匂ひの中を行く

約束がふと恐ろしい夜なりき

廣江 天痴人

歟洗ふ水の中から秋が来たよ

二十圓のむかしこひしい田の眺め

毛利 九波

ホールから中野英治が二三人

街の哀愁 絹靴下の汗よ

中島 鐵洲

焼茄子の女の指に裂かれ居て

ヒョット出て錢の出處なつかしむ

丘 遊舟

叱られぬ嘘は戀人だけが云ひ

搾取する事も自慢の一つにて

妻のないあとは子供と恩給に
湯原 美笑

粒々集

御影 長崎 柳秀

ウエイトレス稼ぐ自信の眉を引き

女房の苦勞はしれたやうに云ひ

タイピスト歸り仕度へコンパクト

反應の鈍い男が金をため

にくむ氣へ女いよく美しい

若葉風ねむい講義にしてしまひ

この年へお酌の過ぎた世辭を聞き

萬年ペン試しに書くも彼女の名

頼る身となつて世間の裏を知り

立て替えて呉れる女に見る醫

支那通の云はく賄賂の活し方

草の風トンボ根よく調子とり

日月火水木金土どうか成り

管制の夜を天の川低く濟み

松山 前田 五健

川柳家名鑑志 (一)

— 戶籍調四百名に達して —

係・山雨樓

川柳家戸籍調は本月を以て四百名に達した。統計をとるにしても相當有力な材料になるであらうと思ふ。本年四月號の「川柳街」では布部幸男氏が「川柳作家考現學」と題して、宮尾しげを氏編「昭和川柳百人一句初篇」から興味ある考察と數字を列記されたが、それに四倍する廣汎な材料に據ることであるから、この統計が語る何物かはある趨勢と暗示を呈示することであらう。

九	八	七	六	五	四	三	二	一
月	月	月	月	月	月	月	月	月
生	生	生	生	生	生	生	生	生
三五	二五	二五	三八	二八	三一	三二	三二	四二

といふ状態で、一月が最も多く七、八月は夏涸れであるが比較的各月平均に近いこれは稍意外に思つたことで、生れ月の神秘など云ふこともあるから、川柳を愛好するものは、自然或る氣質的類型を有し、従つて生れ月の如きも偏するであらうと豫想してゐたところ、右の如き數字が出たので、更めて次のやうな考へを抱くに至つた。即ち川柳を愛好するのは所謂人間性を愛好する所以であり、川柳は純な素直な、そして鋭敏な感受力があるもの（人間性に對して）ならば、別段特殊な稟質を持たなくても馴染み得るものだ、と。この結論を捉えたことだけでも僕には無上の喜びを覺える。

更に生れ月毎に著名作家を摘記すれば

- 一月 久流美、壽明、久良伎、銀波樓、荷十、五健、叱咤郎、文久、山門、睡花、錦浪、花川洞、紅太郎、千枝
- 二月 水府、花菱、晟修、霞乃、紫明、鮎美、若蛙、茶六、砂人、不浪人、啞三味、幸男、京之助
- 三月 半文錢、虹衣、東魚、(故)蚊象、正光、雀郎、福造、松窓、啞亭、金一郎
- 四月 東洋鬼、三休、○丸、二南、汀柳、舟人
- 五月 (故)冷刀、春雨、天痴人、琴人、雨迷、天民、勝二、紫痴郎、陸居
- 六月 劍花坊、雅幽、夢二郎、町二、餘念坊、綠之助、夢一佛、小太郎、艸樂、珍竹林、鶴太郎、二山
- 七月 路郎、馬行、角戀坊、五花村、玉兎朗、十七八、杜若、凡柳
- 八月 乾坤、太郎丸、清公子、一徹、浪人街、素生、柳秀、民郎、默然人、天邪鬼
- 九月 日車、綠雨、鶴足、濁水、壽山、三福、麟二、豆秋、琴夢、黃子朗、五呂八、盈光、琴莊
- 十月 溪花坊、夢路、可明、一二、寬汀、雅樂王、ひろし、鞍馬、文終、綠朗、宵果
- 十一月 松郎、義矢滿、(故)卯木、杏三、(故)愚陀、華水、青龍刀、鐵扇

花
十二月 紋太、かほる、芦穂、飯山、
美の作、百樹、亂耽、雞生子、鐵洲
(故)晃卓、雨吉、無冠王、瀧人、
柳建寺、孔雀、刀三

○それから生れた日の變つたのでは
一月一日生 久流美、白鷗、十紫
二月二十九日生 水府
十二月三十一日生 悠々、飯山

○次に雅號と本名とに就て調べて見ると
(上は總て雅號)先づ氣がついたのは川柳
家には堅苦しい名前が多いと云ふこ
とである。

五呂八次 俊
兔絲子 太 範
隨帖 正 敏
秀花坊 欣 司
三笑 智 安
濁水 春 城
華郎 正 明
鎌月 義 信
手腕坊 重 由
白蝶 量 儀
亂耽 長 陽
夢一佛 信 正
華水 義 朗
享史 利 明
桃水 義 則

可 明 義 久
双 柳 進 俊
山雨樓 義 達
憲 翠 隆 誠
乃 氣坊 眞 司
枝 呂 道 祐
利 劍坊 康 繁
夢 二郎 正 規
○ 丸 義 豐
町 二 祐 布
樂 鳥 信 義
裸 人 正 信
芽 十 輝 喜
慕 秋 彬 弘
狂 水 克 位

黄子朗 一勝 利
青龍刀 一秋 朗
苦樂公 一清 親
青 兒 一政 宜
幸 捐 一泰 典
九 天 一義 隆

葉 平 一順 康
柳建寺 一準 章
紀 太 一永 久
白 峯 一義 秋
九 天 一義 隆

○雅號を川ひず、本名で通してゐる人達
では
省二、春三、太郎丸、雅幽、龍二、一
二(森田)、袈裟雄、益男、三太郎、忠
八、良之祐、計加、民郎、有石、十七
八、金一郎、玄六、喜由、與三郎、正
光

などがある。尤も省二氏は石井姓を蛭子
姓と稱してゐられる。女性作家は大抵本
名そのまゝであるが字は異なるものが多い
葎 乃 一よしの 機見女 一季 美
(故)欣女 一きん 吟 女 一きん子
○面白い名では
芦 穂 一折 平 愚 劣 一廣 須賀
瀟 明 一 大 平 志 貴 南 一 延 金
花 菱 一 正 平 楓 林 一 林 兵衛
五 花 村 一 五 平 半 疊 一 立 名
素 人 一 秀 逸 大 紅 一 三 郎 兵衛

○数字の順では
天民子 一 一 郎 水 車 一 二 郎
半文錢 一 三 郎 映 絲 一 永 四 郎
五花村 一 五 平 晟 修 一 六 郎
松 郎 一 七 郎 忠 八 一 忠 八
夢 路 一 久 吉 荷 十 一 嘉 十 郎
○親しみのある名では
紋 太 一 文 之 助 綠 雨 一 與 作
劍花坊 一 幸 一 虹 衣 一 源 三
新 水 一 親 市 舟 人 一 松 之 助
松 窓 一 萬 七 晒 亭 一 仁 助
鶴太郎 一 長 松 角 戀 坊 一 英 吉
○故人となつた川柳家
五葉、卯木、蚊象、愚陀、晃卓、奈緒
美、文錢、冷刀、松雨(西垣)、千代二
欣女、虚白、志郎

觀月 一武 猪 (故)晃卓 一 雄 賀
秋無草 一しげあき 變 人 一 彌 熊
椿 薰 一 七 五 三 一 凡 柳 一 喬 木

○姓名と全然別なペンネームの方は
山香美 兎月 一山下 仙太郎
久方 慕秋 一 日 佐 嘉 多 彬 弘
品川 陣居 一 中野 竹 雄
河柳 雨吉 一 赤塚 時 男

○本名の讀みにくいのでは
久 良 伎 一 辨 (ワカチ)
丹 三 郎 一 福 (ヤスシ)
摩 耶 火 一 雪 (キヨシ)

○数字の順では
天民子 一 一 郎 水 車 一 二 郎
半文錢 一 三 郎 映 絲 一 永 四 郎
五花村 一 五 平 晟 修 一 六 郎
松 郎 一 七 郎 忠 八 一 忠 八
夢 路 一 久 吉 荷 十 一 嘉 十 郎

○親しみのある名では
紋 太 一 文 之 助 綠 雨 一 與 作
劍花坊 一 幸 一 虹 衣 一 源 三
新 水 一 親 市 舟 人 一 松 之 助
松 窓 一 萬 七 晒 亭 一 仁 助
鶴太郎 一 長 松 角 戀 坊 一 英 吉
○故人となつた川柳家
五葉、卯木、蚊象、愚陀、晃卓、奈緒
美、文錢、冷刀、松雨(西垣)、千代二
欣女、虚白、志郎

名物川柳



北陸の巻

親不知 (二)

安川久流美選

雪害の話がもてる親不知
藪入りのほつと息つく親不知
親不知子不知浪が鳴つてゐる
親不知晴れて巡禮に岩があり
今岩間はなるゝ雲の親不知
夏の風此所は難所と思はれず
波よりも崩雪が恐い親不知
親不知辨當殻をすてゝみる

三々浪 照坊主 忠行 素描 茸若 甘露 しとし 白羽

親不知蟹が道案内をする
親不知事件と別に月が照り
落陽へ波おだやかに親不知
親不知男の腕を信じきり
叫べども只浪の音親不知
親不知そゞろ歩きも旅行好き
親不知死出の名所にならでよし
汽車の窓開けて待つてる親不知
今すぎたとここです夜行親不知
親不知夏の旅行に喜ばれ
親不知遠くシペリヤからの風
先生のお話がある親不知
親不知固唾をのんで無事通過
親不知空氣枕の空氣抜き
一つだけ海に灯があり親不知
浪の音親不知とはあつけなし
親不知ボタンと窓を開け

寒光 緑水 利生 新市街 紅 新水 輝亭 春峰 曉童 今雨 末廣 義風子 壽美子 豆秋 同 百水樓 同

短評 十八章

福田山雨樓

今回の課題は「海水着」である。各句に付批評を加へることとする。

○ 海水着俺のからだの細いこと 琴月

質感であつても表現力が弱い。只「細いこと」だけでは追つて來るものがない。細き身をかまきりにたとへる手法もあるが、兎に角も少し工夫を望みたい。

○ 唯濡れただけで嬉しい海水着 清春

句は纏つてゐるが内容單純の嫌ひがあり、句想そのものに多少妥當を欠く點がないでもない。下五を「娘の水着」とすれば多少救はれる。

○ 派 な水着に頼りない 浮標 葉光

見方が單調である。「頼りないウッキ」もヒンタリ言ひ當てゝゐない。水着は立派だが泳ぎは頼りないと云ふところを詠みたいのなら

うと思ふ。調子がよいからと云つて只ウキと持つてきたのでは駄目だ。

○ 砂にまるぶ海水着へ來る潮の足きよ志

句が散文的である。そしてこれでは平凡な事柄の説明になつてゐて、面白さとか可笑味とか云ふ聯想を呼び起さない。も少し海水着を生かした見方を望みたい。

○ 海水着脱げば背にはチヨツキ型柳 夢

海水着を脱いだ背を見ると、陽に焦けてゐないところがチヨツキ型に残つてゐたと云ふ想であるが、それでは普通のことと過ぎない。何かそこに特異なもの（例へば炙とか刺青とか）を發見して欲しい。

○ 海水着はにかむ娘又座り トミヤ

調子は佳い句であるが、又座りの「又」がわざとらしい嫌ひがある。これを「座りこ

み」としても不自然であるし、結局下五をすつかり取り替へるより仕方があるまい。

○ 海水着波に乳房を打たせて來 紫陽

類想を脱した見方ではあるが、下五が拙い寧ろ「打たせてゐ」の方がいい。「縮かませ」としても面白いと思ふ。

○ 肌の香にしみ込む色に海水着 天國

句意が明瞭でない。つまり句に重點がないからである。この句は肌の香に重點をおいて、「肌の香の甘さを見せて海水着」と添削したい。

○ 海水着のあとを残して避暑歸り 花城

普のことに過ぎない。事實その儘の報告に了つてゐる。そこに作者の眼を働かさないくはよき川柳にならない。「海水着の戀打明けず避暑歸り」

○ 水あびぬ子にも水着を買つて 御穂子

着想が幼稚である。「十三を頭に水着五人連れ」といふ風に云ひかへて見たい。

○ ポータブル鳴つて月夜の海水着 双亭

場所が出てゐないので、印象がはつきり来ない。そしてポータブル、月夜、海水着と道具建が多過ぎる。「ポータブル圍んで水着二人ある」

浴場を色で埋めた海水着 小寒
見方が印象的でない。「浴場で黄な聲出す海水着」

泳げない 最新型の海水着 白英
皮肉味はあるが内容が既に古い。同じ作者の句に「水着ふと海の魅力に怯えたり」があるが概念的なところが惜しい。

海水着熱砂に残る尻を消し 木履
言ひ足りないのか、言ひ過ぎてゐるのか免に角句意が不明である。餘り考へ過ぎたのではないかと思ふ、この句は出直すこと。

海水着案 外父の泳ぐなり 水客
この句は情味があり、とぼけたところが面白いと思ふ。只海水着と云ふ題詠吟として上五とそれ以下の言葉とがしつくり合つてゐない點が聊か物足らぬやうだ。どちらかと云へば冠句に近い。

海水着母も若さをとりもごし 當樂
一寸思ひ付きの句であるか、それだけに味はつて見ると理窟深い感じがする。これは素直に「海水着母にも若い背の線」位にしたい。

海水着少し笑ふて寫して居 美代坊
くすぐつたいやうな氣持はわかる句であるが、どうもこの儘では平凡を免れない。「海水着笑つたポータブル寫される」

海水着若さを海に捨てに行き 久米雄
梁には海へとしたい。海と云ふ字の重なるのが氣になる。否それよりも想そのものに概念的なところがあり、ピンと来ないのだと思ふ。再考を望みたい。
○
で今月頂戴したい句は、

柳翁忌

初代川柳翁逝いて一四五五年、柳壇は年と共に隆盛を競ひ、同好は愈々多土を加ふ。茲にわれは翁の偉業を偲びつゝ、心からなる思を營み、その遺靈に應えたいと思ひます。追て當夜は關西行脚に來阪せらるゝ、東都の高須啞三味、品川陣居、山川花戀坊の三氏がこの柳翁忌に臨まれることになつております。

日時 九月十一日(火)午後七時
場所 道頓堀俱樂部 大阪市南區日本橋南詰東入南側(電話南二七四六番)
兼題 「中之島」 三句 麻生路郎選
兼題 「名月」 三句 朝田新水選
講演 麻生路郎氏
會費 三十錢
右柳翁忌散會後 三氏の親迎懇親宴を催しますから三氏を知らるゝと否とに拘はらず奮つて御賛同の程を願ひます。

食慾は百パーセント海水着 蛇之助
海水着めげは忘れる戀であり 世留逸
海水着戀に破れた色でなし 都留逸
水着きて暫し階級意識せず 世留音
戀が欲しさうな水着の映えた色 青柿
海水着ホートの戀は沖へ漕ぎ 子洋
○
「秋風」十句以内、〆切九月十日。宛先 大阪市浪速區湊町保線事務所福田山雨樓宛 但し一般投句と同封するも可。

代理フト逆光緑の窓を見る 末廣草

佳吟

本人は馬鹿とは代理云はぬなり 葉光
御主人の代理へ羽織させられる 春峰
代理だと云ふ半ズボンよく喋り 彩 泡
代理して満座の猪口を低う受け 新市街
代理とは氣付かず禮を云ひ過る 紅

巡禮

◇ 没食子選

巡禮はやはり昔のまゝで良し 太一
巡禮は野宿する氣の 一休み 小櫻
巡禮の身の上を尋ねる人もなし 香山
巡禮の母娘が 懣ふ堂の縁 青山
巡禮へ神經質な聲がする 承春
巡禮の懺悔を聞いて坂を下り 東陽
巡禮がふと美し生活苦 青柿
しみみくと見れば巡禮鈴を振り 春陽
御詠歌を流し敢果ない親子連れ 祥月
巡禮の一人であつたのに氣付き 小松
聲のよい巡禮だこと奉謝する 靜波
巡禮に巡禮道を尋ねて居 柳夢
巡禮よこれから何處へ行くつもり 遊女男

撲られる筈でなかつた代理だに 喜 由
組見へ代理の顔を塗つて行き たげを

先生の代理銀行迄走り 同

秀逸 任されて来た先様のむつかしさ あや美

自 句 聲にも唾にも代理なる強さ 五 健

市場没食子共選

平岩没食子共選

巡禮の持病へ雪が降りかゝり 末廣艸

○

黒幕へ巡禮の傘ひつかゝり 天國
同行二人幾山河を越え行かん 正夫
御詠歌へ懺悔を込めた節廻し 彌生
お大師の杖にすがつて強く生き 紫陽
巡禮へ子までお通りやすと云ふ 白英
交又點巡禮別な目で通り 白坊
株で損してお四國を巡るなり 葉光
色街の中で巡禮雨にあひ 有魚
巡禮の詠歌に母は和して誦し 蛙庵
同行三人大阪城をほめて去に 白峰
巡禮のこはく、春季發動期 喜山
巡禮の今日は流にそふて行き 朝雨

琶、(10)有妻一男二女但し二女共亡弟の遺兒、(11)、(12)昭和二年十二月頃

國澤 春水 (3036)

(1)國澤榮吉、(2)春水、(3)高知市朝倉町九十九番屋敷、(4)右に同じ、(5)明治四十四年十二月廿日、(6)小生で十代目の疊屋です創業慶長八年、(7)獨酌の底にしみる、我が心(濁水先生)。酒とろり、大空の心かも(路郎師)。ちよは、へ抱かれるときは手を擴げ(紋太氏)。(8)未だくです、よい句は(叔から生ませう)、(9)凡そ職業に反對なもの、(10)無し、(11)お役人根性、(12)昭和四年、今に濁水氏を師としてゐます。

大橋 素月 (3037)

(1)大橋龜男、(2)素月、北流、(3)大坂市此花區安治川上通二丁目十一、(4)右に同じ、(5)明治三十八年一月廿七日、(6)關西土地株式會社、(7)きつちりと坐れば春のよい心地、(路郎)。大坂は號外くばる旅戻り(水府)。去る人は去る月はただ白く(葉平)、(8)築港の土へ置かれたバスケット、(9)庭球、魚釣、(10)妻あり子供一人、(11)小金持、タクシー、(12)昭和四年十月

丸橋 松雨 (3038)

(1)丸橋松治、(2)松雨、時々絹見陸奥夫の別名を用ふ、(3)鳥取縣東伯郡倉吉町、(4)大阪府豊能郡麻田村登番地、(5)明治四拾三年三月廿日、(6)只今入院中で、(7)なあちろりこれから秋に親しいも、(8)路郎、西向けば丹波路なり淋しい日(松窓)幸福の御膳は缺けてゐてもよし、(9)琴人、(8)自信の句はありませんが、

愛着を捨て、四國の旅に立ち
巡禮の今四五ヶ寺のとこで病み
南無大師大慈巡禮坂になり
巡禮の夢は故郷の青い山
巡禮の子の眼についた風船屋

佳句

巡禮の哀話が 残る 札所なり
せらぎで巡禮何か洗つて居
巡禮に出て有難き道を知り
黙禱の巡禮山の呼吸をすひ
巡禮へ刺戟の強い都の灯
職業にする巡禮の眼がとがり

巡禮歌舞臺

運命は暎の母に會ひ乍ら
巡禮へ春の匂ひが裾を巻き
巡禮の隣へ行つて次を詠み
巡禮へ早速銅貨見當らず

三才

(人)巡禮の白衣の判は見返へん 崑喜固轟
(地)巡禮の親子へ無事な月が出で
(天)巡禮の旅寝の夢にうつるも
(軸)鶴三の繪そのまゝ巡禮が來

司郎選

巡禮の後すさりして禮を云ひ 蛙庵

よく見れば巡禮筈に安藝らしく
巡禮の娘に消えて行く場末の灯
巡禮に巡禮路を尋ねて居
巡禮を追越して行くハイキング
巡禮へ早速銅貨見當らず
御報謝へ巡禮詠歌よく揃ひ

巡禮の今日來た土地は夏祭
懸取りのあとへ巡禮門に立ち
巡禮の旅寝の夢にうつるもの
巡禮の筈に蝶々がたわむれて
朝霧の中を巡禮一人行く
巡禮に暮れる他國の町並木

佳作

順巡も今日の號外讀んでゐる
しみんと見れば巡禮鈴を振り
巡禮に三度の夏の蛙鳴いて
巡禮を不運な路が邪魔をする
巡禮とかわる姿を見送られ
巡禮の白い姿へ鯉がはね

巡禮へ春の匂が裾を巻き
同
秀逸

秀逸

巡禮の一人であつたのに氣付き
ことわりもなく巡禮のことは

御燈明鼻のあたりが淋しいな。星遠くこ
ゝる貧しき夜なりけり。等自分でも好きな心
の底におみななる。等自分で好きな心
です。(9)健康な時分はスポーツ、魚釣
登山、園藝、キネマ等々何でもこいでし
たが只今では境遇ト讀書が唯一のたのし
みです。静かな音楽とても好きです。そ
して未知の柳人から便りを戴いた時は
てもうれいです。(10)なし、(11)嬉しいな
ものはあまり有ません強ひて言へば饒舌
な女、蛇、人參等です。(12)昭和七年頃
からです。

(320) 岩崎松代

(1)岩崎松代(2)御座いません(3)明治
三十九年四月十二日生(4)兵庫縣川邊郡
の田舎(5)滿洲國熱河省凌源小西街(6)
「カフェエーモダン」經營(7)呑んでほし止
めてもほし酒をつぎ(8)「霞乃」(8)いまだ
御座いません(9)商賣より外に有りませ
ん(10)主人と二人です(11)特別に申上げ
る程の事は御座いません(12)昭和七年春
頃より柳路に教わる。

(330) 植山九天

(1)植山義隆(2)九天、霜葉、(3)大
分縣下毛郡三保村大字福島(4)兵庫縣川
邊郡小田村潮江堂ノ後一四、(5)明治卅
八年八月十二日(6)大阪鐵道局經理課
調査掛、(7)元旦だせめてめがねをふき
ませう(路郎)母が父、息子畦で一言へ
山雨樓(8)めがねふき、嘘を言ふ
てる、(9)スポーツ、その中でテニス、
スキーは相當やりました。他に玉突、麻
雀、謡曲、甚多すぎでこれと云ふほど
もの、(10)妻あり、(11)長女一
人、(12)昭和八年一月。



柳川二十日會

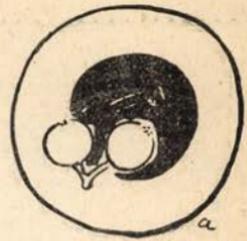
川柳二十日會にはさなだでも
馬路出来ます、毎月二十日の
午後から夜にかけて不折柳一
南橋玉出陣西三丁キケンツ喫
茶店にて路郎主幹を中心に語
る會です、會費の定めはあり
ません。

▼第二回の二十日會は甲子園の
全國中等學校優勝野球大會の優
勝戦と同じ日であつた。當日集
まつた方は次の十名であつたが
縁雨氏はミセスとダーター一家
族連れで訪れられ路郎先生を喜
ばした。亂耽、山雨樓、史呂、
縁雨、艸樂、禿山、機見女、豆
秋、半疊、夕鐘(S)▼この日先
着は亂耽君、僕は是非違ひたい
と役所の仕事で片付くなり駆け
つけたが同君は歸つたあとだつた
ところが今日はよつほど行き違
ふ日と見えて、艸樂氏が僕に逢
ふべく恰度僕が辭去したあとへ
行くくと云ふ始末、史呂君も與三
郎君の來るのを今や遅しと待受
けてゐたが逢えなかつたらしい
▼商買人の史呂君はこぼれるや

うな愛嬌のある人。四、五年前
の七月三日自轉車で六甲越えを
した話。同勢四人連れ、午前四
時頃大阪を出發して、六甲ドラ
イブウエーを自轉車を押しで登
つたのはとてもえらかつたさう
だ。そして下りは有馬から寶塚
へ出て大阪へ歸着したのは夜の
九時だつた。氣の揃つた四人
なればこそやれたものだから、も
の凄いやサイケル、チャンピオン
ではある▼僕も自轉車に乗るこ
とは好きで、一度農人橋の藤本
印刷所から西成區千本通の以前
の不朽洞迄走つたことがあるが
沿道に子がばら〜と居てあぶ
なくて困つた。そこで路郎先生
曰く「若いうちは突き當る迄は
安全といふ氣で走るのだよ」
(山雨樓)▼頭の大きい頼朝の噂

や、清盛の話が出たのを承けて
半疊氏は、最近手に入れられた
「鹿兒島外史」の讀後感と六月版
省の途赤岡宮參拜印象から秘史
外傳を打明けられる▼その一端
を洩らすと、安徳天皇は壇の浦
から平家一門と薩摩に遁れ、養
和帝として硫黃島に行在、御壽
七十八にて崩御されたらし事、
など史家が眼を丸くする話(S)
▼私は先月喋り過ましたので今
度は聞き役の方に廻りました
話は無軌道で一寸したキツカケ
からそれからそれへと、丁度水
中に投げた小石から波紋が擴が
るやうに何處迄行つてとまるの
か知らぬ間に話題が替り、種々
雑多な事たとへば熱の話から清
盛へ、平家の落人から秀頼の亡
命、さうかと思へば義經が飛び
出す等々歴史談となり、それが
いつかボンビキの話に變つてゆ
く。川柳になつては六厘坊の話
へと、つくる處を知らないの
益する點が多い(禿山)▼前月の
二十日會の記事中僕が上手に聞
き違えてゐた點があつた。即ち

桶樂寺の所在地ヘナンがマラツ
カ滝峽の手前になつてゐるが、
あれはずつと先であるとの事だ
佐藤選手も浮ばれぬわけ(山雨
樓)▼たとへば春の淡雪が、ふ
かすパットの煙のやうに、すぐ
あとから〜忘れてゆく津の殘
らぬ二十日會の話も、忙しい僕
らの生活には糖分とともにも時々
補給されるのといふと思ふんで
す(史呂)▼機見女さんは茂乃奥
様と嬉しさうな話▼夕鐘君はす
きな盆踊りの話でもちきり▼聞
き役と云つてゐる禿山君も仲々
雄辯であつたさうな(S)▼キン
グ横町を出てから一同行儀よく
一直線に歸宅▼終電車を待つブ
ラツト、ホームのベンチで驛前
の「旅館」と書いた行燈の字が讀
めぬ私の近視を笑ひ合つたり、
この前「キンク」からの歸りに禿
山君と此のベンチで朝まで寝て
ゐたはなしなどに新秋の冷氣が
氣持よく流れる。夜警の拍子木
がま近に又は遠くに聞こえてゐ
る「二十日會もざりはいつてもこ
の電車」(豆秋)



古狸窟雜筆

(六)

梅 木 塵 山

(六〇) にうめん

素麴の煮たるものを、にうめんといふ。昔は此れを熟麥といひたるが如し。亦、入麴と書くは借字にて煮麴と書くなる可し。「七十一番職人盡歌合」

素麴賣
てうさいのこしきの上のあつむきのむしあけの瀬戸月あたる見ゆ

「中御門宜胤卿記」

文龜二年五月廿五日。今日内裡御月次和歌の御會也。云々。又有程一身被召御末賜入麴天酒等。

(六一) 白瓜藝

少年の時に、技藝の優秀なりしも、壯年に到りて劣弱なる者を、白瓜藝といふ。「白石先生紳書」

時に先生曰、とかく三十以後四十ばかりの頃ならではいかにも申されぬ事也。

某若かりしより、幾千百か幼敏の人、見もし聞も仕るに、末の劣りたる多し。俗に白瓜藝とやらん申て、一寸二寸の時は價貴く待れど、尺にも至らん頃には、殊の外價賤しくなり待ると、云々。

(六二) 出頭箱

出頭箱と稱するもの有り。日用の器具にても容れ置くものにや、今詳ならず。

「好色二代男」卷三

九兵衛が参たらば、此文持せて、晝より前につかはせとの御申附と、棚より出頭箱をおろし、御状と香箱をわたす、云々

(六三) 御拂箱

儲人を遽に解儲するを、俗に御拂箱といふ。

ふ。此れは新年の年玉として、贈答せる扇箱を、賣拂ふに譬へたるものなる可し

「諸國武道容氣」五之卷
夕べ此へんにとまられし侍衆の家來、中書島に遊び入て、親方のお立も知らず、さめて跡より追付しが、首尾は大かたおはらひ箱であらうと、木に竹ついだ咄、云々。

「睦多雁取帳」

親方のやちをはなはだ腹をたち、ふるわんぼうに、寝御座一枚にて、御拂箱の身となりしが、云々。

(六四) 寸白

女子の腰部の痛む病を、すばくといふ。寸白と書くは借字なる可し。「榮花物語」卷第七

今は醫師に見せさせ給ふべきなり。いと
おそろしき事なり、と度々聞えさせ給へ
ど(中略)御容體を醫師に語り聞すれば、
すばくに在しますなりとて、云々。

(六五) 龍宮の門卒

水母を、龍宮城の門卒といふ。其故を
知らず。

「燕石雜志」卷之四

童話に云く。龍王の少女病て、猿の膽の
炙を嗜めし。よりに龜を島山へ遣はし、
猿を誑きて具闕へ誘引せしが、門卒なり
ける海蛇、そと謀を漏せし程に、云々。

(六六) 蚯蚓書

我邦にて、筆蹟の拙きを、蚯蚓がきと
いふ。支那にて、筆力の柔弱なるを、春
蚓といふに同じ。

「榮花物語」卷第十三

御乳母持ちかけ奉らぬ折なく戀ひ奉る。
姫宮蚯蚓がきにせさせ給へる、これいか
で高貴の許に奉らん、云々。

「續書讀」

唐太宗云。行々若素「春蚓」、字々如「縮」
秋蛇。惡し無し骨也。

(六七) 狸 汁

狸汁といふものに二種あり。一は狸の
肉を汁に煮たるもの一は蒟蒻、赤小豆、

豆腐を味噌にて煮たるもの也。

「瓦礫雜考」卷之二

大草家料理書に、むじな汁の事(たぬき
もむじなも理はおなじなるべし)焼皮料
理共云。但わたをぬき、酒のかすの少あ
らひてさかはゆき程の時、腹の内に右の
かすを入れて、則ぬひふさぎ、どろ土をゆ
りゆりとして、能々毛の上を泥にてぬり
隠して、ぬか火にし焼候也。やき様の事
下に糠をしき、上にも懸てうむし焼にし
て土をおとし候得者、毛共に皆土にうつ
り候を、其儘四足をおろし、なまぬる湯
に能酒鹽はいかにもかけしほしてさし候
也、と見えたり。

(六八) 虎而冠

「人言、楚人沐猴而冠耳」といふこと
は「史記」の項羽本紀に有れど、虎而冠
といふことあり。

「鹽尻」卷之七

平時忠爲「大理郷」。好捕盜而盡截。其肘
臂「放」之。嗚呼時忠虎而冠、殘忍尅戮何
其甚矣。云々。

(六九) 毛 瀧

小兒の癩の藥なりと稱して、炙り食ふ
赤蛙の肉は毛瀧といふものなる可し。

「三省錄」

皇朝の人、調味するは禽獸龜鼈なり。た
ゞ虫のみ食ふよしをきかず。古へ芳野の
民は、蛙をもて上味とし、これを毛瀧と
言よし、古書に出たれば人よく知れり。

(七〇) ふづくる

甘言を以て他人を欺瞞し、而して自己
の利益を謀るを「ふづくる」といふ。

「諸道聽耳世間猿」一之卷

十兵衛はどうした奴。後家の和泉式部を
ふづくつて、穴のある小野小町を養子に
した、云々。

(七一) 情 所

世俗に女子の○部を「なさけどころ」
といふ。其語原に就きて一説あれども、
確ならず。

「發舍漫筆」卷之八

神代一書に、汝己見「我情」時伊弉諾尊亦
慙焉、云々。この處を、往年平田翁の説
に、此情とは則オナサケと訓、陰のこと
なるべし。訓の意は、名避にて、いひ出
がたき所なればなり。いまにても陰をお
なさけなどともいへり。二神相互に慙た
まふ所をもて考れば、陰にたがひなしと
是はあたれるやうなり。

各地柳壇

れ創を句るあちのい



理整・樂艸・雨綠・耶路

川柳會 (茶ヶ池)
雜誌社螢ヶ池句會

八月十二日

兼題 車

綠 三谷梨風報

宿賢へ父と次男が引く車

坂道へ汗をおとして車行く

子を乗せた車我家へ急ぐなり

露路の奥へ夜店の車歸つて來

炎熱の中を車威勢よし

父と子の影ははつきり車曳く

争ひの車は外の雨に濡れ

兼題 夜

與三郎選

夜のきみ美し星がたんとある

虫啼くやがて夜となる病院

病院の長い廊下へ灯が點る

裏町の夜を干物が白いなり

カフエーの夜は煙りにまかれそ

澄みつた夜空死にもないわたし

同 綴 江

夜の底ボン引乙にからんで來
目算はあるなり夜を一人飲む

兼題 裸

史

寒風へ裸踊りの軍旗祭

裸ほめめると力瘤入れ

裸の子逆とんぼりをしてみせる

氣易さの裸同志で碁を圍み

植木鉢に水やる人の灸の數

健康な舩裸で寝てあます

突然に裸の膝がかしこまり

兼題 橋

靜

巡禮の子に橋の名が讀めるなり

待たれて橋もみじかいものとし

橋へ立ち女の故郷の話きく

鐵橋を列車は事故もなく渡り

橋こへてしまつた戀のまぼろし

女の子姉の日傘をさしたがり

兼題 日傘

互

史 呂

同 呂

青鬼

與三郎

流之介

子羊

同 紅

同 紅

同 紅

太選

流之介

節子

與三郎

史 呂

靜 太

節子

病院へ對の 日傘で友來る
睡蓮のほとり繪日傘うづくまり
日傘ひろげてそこいらを歩いてみ
日傘も一人立てば淋しなり
景品にもらつた日傘は市場ゆき
繪日傘はクルくなぎまらばなれ
日傘一つ村を明るくして通り

同 葛 紅 太 靜 梨 浮 風 太 紅 女

川柳會 御旅納涼句會 (大阪)

八月五日 琵琶湖々上みどり丸にて

北川あや美報

大阪はうだる暑き琵琶湖まで遠征しての
句會、船は納涼客の滿載、我が同人は下甲板
の廣い一室を獨尊して作句、上甲板はキャパ
レー丸玉の出張ホールが有つてその女給連
によつて納涼氣分に少し異ふ色彩をそへて
居た。

兼題 湖

翠 夢選

湖に風無し納涼船の暑き

湖へ知は一直線にのび

拂日を逃れ湖水の冷を知り

舟歌が一つかすめた竹生鳥

(軸) 心中の嗜湖心はくれないすむ

兼題 記 錄

翠 夢選

あ、戀の記録の薄れたるあはれ

馬鹿にすな記録破りの暑さだい

眞鍮な戀に日記を忘れ勝ち

(佳) 記録にも止めず戀の御亂行

(軸) 記録今十三で子を産んだなり

風鈴へあんまり意見きつすぎる
かなしげに風鈴の音秋を呼ぶ
風鈴は静か大きな雲が行く
風鈴へまともにあたる稲光り
小松

長野史郎選

汚水の泡へ生きてゐる虫
ぶつくと泡が浮いてる空模様
故郷思ふ瞳に淡しシヤホン玉
子供等の無邪氣泡をかきまわし
かすかなる波紋残して泡の消へ
運命のやうに消へて行つた泡
たゞのがヒツソリ閑とうかんで
人間の命を泡にして稼ぎ
石鹼の泡へ不満をすてませう
蟹の泡母のない子へ陽が沈む
シバ餅の使ひ忘れた蟹の泡
考へてみれば命は泡なり行き
石鹼の泡を剃刀掃いて行き
快談の髭にビールの泡がつき
互選

兼題 泡

紫陽樓

問達であつた電話をビシヤと切り
まむし屋へ夫婦といつた姿で来
まな板へ鰻の狂ふのもあはれ
女ばかりへ市外電話がかつて来
聲だけは袂をきた電話口
生きる詩が扇子に太く書いてある
運命に泣く妓が持つて舞ふ扇子
こむ僧の受ける扇子の古びたり
無心云ふ扇子は全部開いてゐず
骨とつた蹠に生の波うてる
電話短く小切手を書く
小松

席題 うなぎ、電話、扇子

心府

うなぎありかなくぎ流へ土用の陽
扇子バチ／＼やるのもらふの
電話口もうあきらきた聲になり
詫を云ふ姿とみえぬ電話口
小松

川柳

梅田觀劇句會 (大阪)

室町御所
長刀を持つて神經質になり
叛逆の地位も名譽もあらざりき
戀故に親しき友を偽はれたり
盲目の失戀空をつかみたり
大小をさすりて非人小屋に住む
笛吹へて片葉の音に風吹ける
物語り焚火に顔の疵がみへ
盲目の姫の聲音に近寄らん
盲目の池田丹後に月寒し
丹後の武骨姫のまごゝる
おぼる月室町御所の灯は驕り
観月

題 室町御所

観月

振分小平
股旅のお禮も聞かず行きさす
また／＼のうしろ姿へ戀こゝる
人助けびの明日と云ふ日がなかり
また／＼の明日和云ふ日がなかり
立廻りみんな殺して晴れてくる
本水使用すべつた見得がうけてる
ひょうきんに男を賣つて旅をゆく
股旅の一人へ空の渡り鳥
魂は義侠に光る日本刀
ゆく秋と道中差に道白ろし
同美

題 振分小平

同美

月白ろく川端を走る旅がらす
股旅へほろりと雨のひとしずく
川柳今里句會 (紙上) (大阪)
市場没食子報
木戸 かげる選

川柳

今里句會 (紙上) (大阪)

中銭が要り木戸口でひきかへし
木戸口は頭の上で怒鳴るなり
木戸番の一寸法師人を寄せ
見世物の木戸崎形兒のやうな聲
木戸番の鞭た／＼かした／＼書看板
(人) サカサの樂屋木戸さかへり
(地) 木戸番の横で小猿が遊んで居
(天) 木戸口へ初日の札に並ばされ
(軸) 今晚の藝題は木戸へ張出され
行 狀 鮎 美選

行 狀

鮎 美選

行狀は夜行にゆれる二人なり
行狀へ女指輪が光つてゐる
行狀を語る女はすれてゐる
行狀を知れば女は黙すなり
(秀) 行狀を素破抜く氣の影を追ひ
(軸) 行狀の世間に白ろき晝の夢
艱苦しき疊に顔をぶつけてる
青疊近頃有卦に入つてゐる
作法とは摺足になる疊の目
子澤山疊一疊無駄にせず
大掃除古い疊は裏へ干し
代表の鼻をかすめる青疊
同水車

艱 艱

同水車

工事場に安全第一のビラが見え
旅費こちら持ち貼紙の陽にやけて
貼紙に大きく書いた土用丑
電柱へ女工入用貼つて去る
（軸）妙見の貼紙はつて厄拂ひ
席題 記 憶 久米雄選
記憶にはない問題が出てしまひ
たすぬれば返事ばかりの記憶なり
ぢいさんの俵が浮く寺の門
檢證へ下女の記憶の吃りがち
（佳）母の記憶がないと云ふ子の眼
（同）いやな記憶を捨てる上か
（同）おぼへてはりまが乳母の囁
（同）人込みで見付けた恩師當ても
（軸）記憶ある顔を呼んでる受診券
席題 兄 弟 ひさし選
兄弟でしんみり父を語る夜
いつはりのない兄弟で無沙汰がち
妻の名も書き添へ弟へ出すハガキ
盆踊兄弟で出る頼母しき
新博士兄はモンペで撮される
兄弟の暑中休暇へ母の獄
兄弟の同じ浴衣夜店へ來
（人）弟の氣兄にわからぬ家督分け
（地）ふしだらを兄しんみりと飲ます
（天）親のない兄弟の蚊帳風にゆれ
席題 眉 水 客選
將軍の眉を寫して夜汽車出る
眉ほのぼのと舞妓月まつ
眉書いて用事が多い未亡人

一 蜂
某人
秀太
水客
喜山
笙人
喜山
喜山
ひさし
九天
某人
水客
山雨樓
久米雄

大寫し眉毛の先が光つてる
恩愛が眉一つ動かぬ祈り
引眉の跡が亂れた雨の朝
（軸）眉太き男夜店でなにか賣り
席題 發車ベル 天
發車ベル女のお尻衝いて乗せ
發車ベル賣子の聲のはやいななり
戀人を寄り添はす氣の發車ベル
發車ベルいきなり釣の要るバット
いれむりの客があわてる發車ベル
女房の汗間に合ふた發車ベル
泣落が口をきり出す發車ベル
筋きまりと思ふ眞上に發車ベル
發車ベル故郷の山をはつきり見
（軸）發車ベル賣られての子
席題 無 駄 秀
歩をついたは無駄と云ふ王手飛車
無駄な口たいて歸る涼臺
無駄話女しきりに嬉しがり
（佳）無駄口を云はば廻る舌を持ち
（同）無駄に覺悟二度書く無心狀
（同）キリストは無駄に批評へ手を擴げ
席題 神 秘 喜
神秘なぞ知らない顔で金を蓄め
深淵の神秘へ雨乞ひする農夫
科學からもう一皮の神秘なり
頂上で神秘を知つた朝のお茶
産聲を神秘なものに聞いて起ち
カルガの音でないメソヤスト
六感にびつたり合つて氣味悪し
厄年にかつきり死んだ恐ろしさ

一 蜂
ひさし
水客
秋選
笙人
水客
久米雄
同
秀太
九天
一人
同
天
太選
九天
久米雄
天
水客
某人
久米雄
山選
九天
一人
同
同
某人

孝行をすると云はせた神秘なり
眉あげて山の神秘を語るなり
神秘なる燈火へ集ふキャンアの夜
席題 七 夕 九
七夕を寝こんで書く父の汗
七夕流して見る石投げてある
七夕を飾りも寝る男の子
七夕へ久方振りの筆を持ち
死んだ子の面影が浮く星祭り
七夕のゆうべ綺麗な娘が通り
天の川七月七日定期船
子がみんな西瓜に飽いて星祭り
席題 義 理 某
義理固い夫へ酒の夜が續き
里からの義理がうるさい若さなり
義理のある人は大きな聲を持ち
義理をすませた下駄の減りやう
五十錢玉一個近所の義理がすみ
算盤をはげば義理が強すぎる
義理がたし事も嫁人付けて云ひ
とも角も義理を濟した紹の羽織
（人）遺族席義理ある人に目を反し
（地）暑中見舞亡き友に似て父の筆
（天）義理がたい男の鼻の先の汗
（軸）義理を説く手紙に金と云ふ字が出
竹原柳檀八月會（廣島）
理 窟 承 春 報
尻理窟を無理でも通す最古參
其理窟あとして聞かうと盤を出し

一 光
水客
ひさし
天選
秀太
一光
ひさし
喜山
水客
某人
同
人選
ひさし
水客
秀太
一人
同
水客
久米雄
同
同
香山
彌生

ABC 社句會 (島根・八東)

八月九日夜 於平塚別館 天痴人報

兼題 葡 菊 春 期選

葡萄窓に熟れて職員室の裏 勁一郎

葡萄の房に彼女のまぼろし 一雄

日本中の葡萄酒がほしい病上り 六郎

唇に似合ひ葡萄を食ふ少女 天痴人

黒き葡萄より焦點のない呼吸 勁一郎

兼題 道 天痴人選

馬車道の歌になつてゐる賓の道 久市

腕白の道を問はれてよく教へ 生馬

黄昏の暗をさへぎる蜘蛛が揺れ 青波

資本主義と肌の合はない道を行き 六郎

(人) どの道もどの道も町に下る 一雄

(地) 肥桶を下して街路に無表情 泉人

(天) 採め乍ら救済道路伸びて行き 勁一郎

兼題 底 六 耶選

生活に追はれ 靴の底 勁一郎

がま口の底をはたいて戀を買ふ 泉人

胃の底を洗ふに足らぬ酒を酌み 青波

層籠の底に吐息が落ちてゐた 泉人

あせる子に底面積がまだ出来ず 春朗

無惨なるバラバラ事件の底ふかし あきら

底光りするは彼女の涙がほ 忠治

兼題 耳 泉人・勁一郎共選

この耳に難癖つけた占師 青波

耳がちぎれそうた非常時の烈風 六郎

盗み食ひする兎の耳の動きあし 夢迷

くすぐつたい妓の息が耳へ来る 春朗

荒んでる心へ母をフト思ひ

郷里の母真心こめた假名だより

貧しさへ初めて分る友心

心のこした父の遺言 状態

心から詫げる我子に母は泣き

獨身の心笑ふなビールの音

淺ましい心笑ふなビールの音

世辭言ふた己が心へつばき

(佳) ドン底が母まで心尖らせる

(軸) 倦怠期心で妻へ佯びて居る

兼題 道 樂 春 帆選

片親の甘き道樂者にして

その内になほると道樂見ぬふりし

道樂の昔しを偲ぶ父の趣味

(佳) 道樂もなく長男は律義なり

(軸) 道樂をして来た伯父の人同味

兼題 カートン 彌 生選

カートンを引く手に祈る今日の幸

カートンをかく場所にも鬼ゴッコ

カートンの陰で着替の風を入れ

(佳) カートンを引く自慢の庭を見

(同) 痴話の未涙カートンもあるき

(軸) カートンのまだ寝てない返事

兼題 幸 福 曉 雲選

幸福は其の日暮しの氣やすさよ

幸福を願ふ心で別れて来

幸福が待つてる逆憶切り抜けよう

名門に生れて幸福とも知らず

鼻唄の調子合して共稼

(佳) 幸福は金で買はれぬ健康美

(同) 幸福は朝の大氣を吸ふて出る

悪知りて何彼と理窟母に云ひ

手料理へ理窟言ひ舌鼓

女房の圖星へ理窟これてのけ

酔ふて居る理窟は軽くあしらはれ

疑つて訊へば理窟を付け加へ

人物が出来て理窟に遠ざかり

父の理窟へ無口なる母

理窟には勝つて淋しい戻り道

否定する理窟へ穴を見付けられ

(佳) 双方の理窟聞いてる懐手

(同) 末弟の小さな理窟へ負けてやり

兼題 無 口 酒井大樓選

應對を妻がして居る型なり

ちよこなんと頷いて居る無口者

嫁ぐ日になつて無口は實を告げ

父の無口へ氣兼する子供

逆境を無口な友に勵まされ

かたくな父の意見へ無口で居

(秀) 母のない子の環境が無口にし

(同) 沈黙を守れば意見聞きに来る

(軸) 無口の友が見せる真情

兼題 蚊 蟻 承 春 選

風鈴の音も涼しい枕蚊帳

一匹の蚊を追ひまわす蚊帳の中

添乳へそつと運んだ枕蚊帳

甚仇へ妻は添乳の蚊帳に居る

腹不足へ蚊帳の釣手ははずさ

(佳) 蚊帳の中氣兼忘れた型になり

(軸) 蚊宿の蚊帳へ含監の目の動き

兼題 兼 心 蛙 庵 選

恩讐を忘れて心澄みわたり

芳 泉

定 烈

呂 陽

春 泉

芳 泉

東 陽

春 帆

承 春

同 帆

彌 生

帆 生

春 帆

同 帆

春 帆

左 傳

承 春

芳 泉

春 帆

同 帆

春 帆

同 帆

春 帆

同 帆

春 帆

芳 泉

春 帆

春 帆

同 生

彌 雲

春 陽

香 山

承 春

同 帆

春 帆

同 帆

蛙 庵

帆 選

承 春

蛙 庵

彌 雲

春 帆

同 帆

春 帆

同 帆

春 帆

同 帆

春 帆

同 帆

春 帆

同 帆

春 帆

春 帆

春 帆

編輯の窓 山雨樓

▼新涼來り燈火親しむべき好季を迎えて本誌益々躍進を遂ぐ、殊に前號は素晴らしく好評だったので層一層躍進を期し、諸兄の御期待と御聲援に沿ひたい覺悟である。

▼本誌の表紙繪は多年本誌の爲めに盡して頂いた故鳥平、きよし兩氏の作であり、匾字は同じく本誌の爲め力作を揮はれた故繪重氏の筆である。三畫伯とも既に故人となられたので、茲に路郎主幹が合作として考案を練られ、故人を偲ぶよすがとせられたものである。

▼閑生氏の「頂點を行く」は近作柳繪欄に活躍する出色の作家について論評せられたので、示唆に富んだ一文である。

▼武玉川二篇研究は益々進捗を示してゐるが、更に論議が進みつつあることを省二氏から内報があつた。三先生の御健在を愛讀諸兄と共に祈りたい。

▼「兄弟を語る」は本誌の特輯編であり、好箇の柳壇側面觀である。これは當分續載することになつてゐるから御期待を願ひたい。

▼本誌のみが有する川柳家の横

本誌にお馴染の深い大西長三郎畫伯(本社客員)の洋畫個人展覽會が左記に依り開かれます。主として小品ものであるが、力作揃ひであるから、精々御高評を願ひます。

「戸籍調」は本誌を以て四百名に達したので、興味ある統計と考察を試みることにした。次號にも續載する豫定である。

▼月評は例によつて紳樂居を煩はした。來月號あたりは更に陣容の一變してまみえる豫定である。御期待を乞ふ。

▼本誌は誌面の都合で「柳壇畫報」を休載した。

▼「川柳二十日會」は別項の記事にある通り、益々面白い。路郎主幹を中心に大いに語り且つ談ずることが出来るのであるから、新秋と共に變つた顔振れを期待したい。

▼柳翁忌は別項(四七頁)の通り九月十一日に催すことになつた。當日關西行脚に來阪される啞三

味、陣居、花戀坊の三氏も出席の筈であるから、この好機會に多數出席されんことを祈る次第である。

向三氏は十三日迄大阪滞在の豫定。

▼今回京大の頼原退藏氏は贊助員に、大西長三郎畫伯は客員に本社から推舉され、兩氏の御快

語を得ました。

▼路郎先生は八月十日の大阪時事新報「二人一話」欄へ「球界回顧」と題し執筆され、續いて八月十八日、二十日の同紙家庭欄へも實話怪談を執筆された。

▼きやり吟社創刊十五周年記念事業の一つとして「川柳風俗展覽會」が九月二十日より五日間銀座、三越にて開催される

向同展には今國著名作家の色紙短冊等も陳列される筈。

▼青森の東奥日報の一萬五千號記念事業の一つとして八月二十六日同市公會堂で開催された「川柳大會」に三太郎、雀郎、五

花村、辰修、三休氏等が出席され盛會であつたと。

▼函館の大復興會が、七月一日の夜函館市末廣町の東部事務所樓上で催された。

▼本社今治支部では支部創立一週年會を八月二十五日催した

▼岡田三面子氏は八月八日ARKより「上古史上有名な人を詠ん

大西長三郎畫伯洋畫個人展覽會
期 間 自九月二十四日 七日間
至九月三十日
場 所 阪急百貨店

だ川柳狂句」と題し放送された
▼南北氏劇書展覧會が九月上旬
神戸「そごう」で開催の豫定。

▼本田溪花坊氏は地方の地蔵盆
の光景を見物に、北陸の旅に出
られた。(八月二十四日親不知よ
り)

▼大谷五花村氏は七月下旬から
上京され帝都の都市對抗野球戦
を見物された。

▼前田五健氏(松山)から「六十
年來の大旱魃、雨龍も雷さまも
眠りさめず電車は汽車に變り、
みの笠の千人踊、雨乞の焚火物
凄い光景です」とのお便り。

▼中島鐵洲君(鳥取)は本年十
月第三回輸出工藝展が商工省の
手で開かれるので、参加される
由。

▼平岩司郎君(京都)は盲腸炎で
京大病院へ入院してゐられたが
最早快方に向はれた由。

▼臺灣の宮内耕朗君はこのほど
高峯新高山を登破せられたさう
である。

Nishincho MEMO

▼本社廣島支
部が新設され
ることになり
九月九日の創
立會に福田
山雨樓、西田
紳樂の兩君が
出席されるこ
とになつてゐ
ます。

▼本社の御旅支部(八月五日夜)
釜ヶ池支部(八月十二日夜) 簗
川支部(八月十二日)はいづれも
納涼會を催されました。(別稿
會報御參照下さい)
▼四温吟社の主催で全鮮納涼川
柳大會を八月十二日午前十時よ
り元山海水浴場松濤園で催され
ました。
▼ふあうすと川柳社では八月四
日夜神戸物故川柳家追善會を
協和會館で催されました。
▼本社事務所並に私宛多數暑中
見舞を頂きましたが多忙のため
禮狀を洩らした方もあつたかも
知れませんが。禮狀の届かなかつ

た方にお詫び致します。

▼福田山雨樓君八月十五日紀州
道成寺、八月二十四日大和多武
峰、八月二十八日和歌浦旅行さ
れました。

▼江戸みつる君は(奉天)十一月
來阪されるとの事です、お待ち
してゐます。

▼吉田水車君八月十五日廣島方
面へ商用で行かれました。雲一
つ動かす夏の一人旅「水車」

▼西村山月君は八月十六日から
郷里の養老方面へ避暑に行かれ
ました。

▼日野華水君は八月十四日芦原
温泉へ行かれました。

▼竹内機見女さんは七月二十八
日武田尾で、テントがはげれる
ほどの雨に逢ひ、そのときの飯
盒の御飯の味は忘れられないと
云つて來られました。

▼左の處から寄せ書を頂きまし
た。

八月十六日松山から雨乞川柳會
七月三十日東京柳友會の七月例
會。七月十四日夜函館復興會
七月二十六日名古屋川柳へちま
會。

▼近藤勇君の母堂が八月十四日
永眠されました。哀悼の意を表
します。

▼花谷かこく君の嚴父が八月七
日永眠されました。哀悼の意を
表します。

▼本號の編輯日に春光、與三郎
機見女、鶴峰の諸君が、事務所
にお出でになつたが都合で中止
したので歸つて頂いた事をお詫
び致します。

▼私は八月十四日郷里へ歸省し
て、八月十七日山中温泉で一泊
の上歸阪致しました。

改 號

▼湯原美笑君(鳥取)は三嘯と改
姓

▼八十島章五君(東京)は獨樂平
と改號

前號正誤

五八頁、福壽山七ヶの石にある
個性 葉光の句
七頁、グレイブに世帯染みたる
顔も出し 大門
二二頁、中段十三行目二十錢と
あるは三十錢の誤
二三頁、中段二行目、吉野とあ
るは吉原の誤

川柳雜誌關係人々

(願はろい)

贊助員

末弘殿太郎

前田五健

中山澤瀾

喜多春秋

春元紀太

池澤樂居

伊藤彦造

篠原春雨

山下松夢

宮岡白峰

高橋かほる

長谷川一徹

鳥山一歩

藤里省二

奥野汀柳

水谷美曉

永田里十九

大田弘雄

大島瀨明

小森不浪

熊谷紅舟

芝田帆葉

山本丹路

岡本一平

大谷五三郎

森東魚

熊谷紅

清水帆葉

朝田新水

片岡直方

大西長三郎

小森不浪

熊谷紅

清水帆葉

朝田新水

笠原路生

岡田三子

小森不浪

熊谷紅

清水帆葉

朝田新水

嘉納純

岡田三子

小森不浪

熊谷紅

清水帆葉

朝田新水

田中純

岡田三子

小森不浪

熊谷紅

清水帆葉

朝田新水

長崎柳秀

川上三太郎

石曾根民路

阿形一鶴

日野華水

編輯局(同人)

長岡半太郎

川村三太郎

石曾根民路

阿形一鶴

日野華水

橋本綠雨

長野晴濱

米村あ花

長谷川三汀

近藤勇次

東谷華水

橋本綠雨

國枝史郎

田村孝之介

西村明月

吉田水車

平井三郎

橋本綠雨

藤村史郎

谷脇素文

大西喜由

吉田水車

平井三郎

橋本綠雨

藤本卯之助

窪田銀波

大西喜由

吉田水車

平井三郎

橋本綠雨

赤井清藏

長野吉高

大西喜由

吉田水車

平井三郎

橋本綠雨

淺田一司

前田雀郎

立井美坊

北山あや美

生田翠夢

主幹 藤田雨樓

道頓堀支部 大阪市 幹事 庄

九三會支部 大阪市 幹事 北山

榎支部 堺市 幹事 八木美夜路

北濱支部 大阪市 幹事 谷村

萩ノ茶屋支部 大阪 幹事 奥野

榎支部 堺市 幹事 榎

神戶支部 神戸市 幹事 西村

松山支部 松山市 幹事 石丸

御旅支部 大阪市 幹事 生田

北濱支部 大阪市 幹事 谷村

今里支部 大阪 幹事 榎

今里支部 大阪 幹事 榎

函館支部 函館市 幹事 龜井

天王寺支部 大阪市 幹事 須崎

天王寺支部 大阪 幹事 須崎

天王寺支部 大阪 幹事 須崎

奉天支部 奉天 幹事 江戶

奉天支部 奉天 幹事 江戶

高知支部 高知市 幹事 國澤

鶴町支部 大阪市 幹事 妹尾

鶴町支部 大阪 幹事 妹尾

八東支部 島根 幹事 平塚

八東支部 島根 幹事 平塚

八東支部 島根 幹事 平塚

梅田支部 大阪市 幹事 水谷

御池橋支部 大阪市 幹事 西

御池橋支部 大阪 幹事 西

玉造支部 大阪 幹事 清水

玉造支部 大阪 幹事 清水

玉造支部 大阪 幹事 清水

釜ヶ池支部 大阪府 幹事 三谷

松江支部 松江市 幹事 梶谷

松江支部 松江 幹事 梶谷

今治支部 今治 幹事 渡邊

今治支部 今治 幹事 渡邊

今治支部 今治 幹事 渡邊

田邊支部 和歌山 幹事 辻

塗青支部 大阪市 幹事 熊谷

塗青支部 大阪 幹事 熊谷

光笑會 大阪 幹事 永田

光笑會 大阪 幹事 永田

光笑會 大阪 幹事 永田

釜川支部 島根縣 幹事 尼

大鐵局支部 大阪市 幹事 植山

大鐵局支部 大阪 幹事 植山

新居濱支部 愛媛 幹事 越智

新居濱支部 愛媛 幹事 越智

新居濱支部 愛媛 幹事 越智

京都支部 京都市 幹事 平岩

西條支部 愛媛縣 幹事 荒井

西條支部 愛媛 幹事 荒井

伯耆支部 鳥取 幹事 三嶋

伯耆支部 鳥取 幹事 三嶋

伯耆支部 鳥取 幹事 三嶋

鳥取支部 鳥取市 幹事 中島

光體會 大阪 幹事 竹内

光體會 大阪 幹事 竹内

竹原支部 廣島 幹事 町田

竹原支部 廣島 幹事 町田

竹原支部 廣島 幹事 町田

萬一

萬一

萬一

萬一

萬一

萬一

川柳雜誌案内

六話活字十四字三行金五十錢、行増すこ
ごに金十錢（但し西金切手代用可）その他
改題、移題、句會、内、柳、表、裏、等、その他

製並 合本特賣

「川柳雜誌」の合本第二卷
より十卷まで

各巻巻 金壹圓五十錢
大阪 市内送料 壹册 六錢
市外送料 壹册 廿四錢

大阪市住吉區平野西之町八三
申込所 川柳雜誌社

懸賞川柳募集

題「若返り」路 郎 選
九月十日締切

その他雜吟を募る

用紙 官製ハガキ（化粧柳
壇と明記の事）

賞品 秀逸數句薄謝を呈す

投吟所
大阪市玉出本通三の三六

麻生路 郎氏宛
化粧新聞社

川柳まやり

菊判每號七十數頁

毎月一日發行一部廿五錢

東京淺草區小島町二の二七

川柳まやり吟社
（取次所）川柳雜誌社事務所

蒐集

▼新聞、雜誌（川柳の雜）に
掲載ある川柳に關する記
事の「切抜」

▼川柳家の集合寫眞、個人
寫眞

▼川柳の短冊、色紙
右の品で不要なものあれば御
贈與下さい

大阪市住吉區平野西之町八三
橋本 綾雨

短冊頒布

筆者 麻生路郎先生

上短冊一葉金參圓 送費不要
作品は入金順に發送、振替は「
大阪七五〇五〇」を利用された
さい（句の希望の方はお知らせ下
さい）

申込 大阪市住吉區平野西之町
八三番地

所 川柳雜誌社事務所内、
短冊頒布係

川柳雜誌投句用箋
本社制規の投句用箋を左の價額
でお頒ち致します。なるべく此
用箋を御使用下さい。

五〇枚綴二冊 價金拾二錢
（送料共）

御申込は本社事務所宛
（一錢切手代用可）

竹原支部創立句會

廣島縣唯一の支部を創設する事になつて本社から當日福田山雨樓
西田坤樂の兩氏が御來竹されて川柳に關する講演ありますから
萬障御繰合せて御來援を乞ふ（幹事）

日時 九月九日（日曜）午後一時嚴守

會場 磯部 旅館

兼題 記念 三句 山雨樓先生

同 眼鏡 三句 坤樂先生

同 艶 三句 英賀夫先生

兼題の「記念」「眼鏡」の天地人に本社から呈賞
九月七日

投句先 廣島縣竹原町
藝備銀行内町田承春

道ブラから天牛へ

書 天 牛 本 店
買 籍

大阪市南區日本橋南詰東入南側
電話 南二七四九番

殘暑御見舞

靜岡川柳會

靜岡市寺町

榎田 珍竹 林

榎田 柳葉 女

投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▼「近作柳樽」は全家の雑吟を募る

▼「川柳塔」への投句は同人に限る。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に詰める事。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記する事。

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

募 集

第十一卷第十一號課題

九月十日締切

(各題十句以内)

▼煙 住 田 亂 耽選

▼枕 永 田 里 十九 共選
竹 内 機 見 女

第十一卷第十二號課題

十月五日締切

(各題十句以内)

▼馴 染 西 田 艸 樂選

▼塚 吉 田 水 車選

每 號 募 集

▼近作柳樽(十句) 麻 生 路 郎選

▼各地柳壇(會報)

▼文章(評論研究感想吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

定 價

一 部 金 參 拾 錢
半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢

廣 告 料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和九年 八月廿五日印刷
昭和九年 九月 一日發行
(每月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻 生 幸 一 郎
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
所 川 柳 雜 誌 社
電話天下茶屋二五七九番

無 斷 禁 載

川 柳 雜 誌 社

振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一六七番

賣 捌 店

(大阪) 大賣捌二盛社書店(明文堂 其他市内各書店)
(東京仲見世) 玉森堂(神戸) 米田、寶文館(函館) 石塚
京都 三宅(名古屋) 靜觀堂

清酒

白鶴禮讚

白鶴の瓶たまることたまること
 白鶴へみんな揃ふたい、話
 い、酒と言へば白鶴持つてくる
 白鶴を一本つけてからの事
 百事意の如く白鶴呑んでゐる
 當選に白鶴樽のままで来る
 貧乏の中に白鶴だけの味

攝津灘

嘉納合名會社釀

